

41652

教科書文庫

4
810
41-1932
20000 64979

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

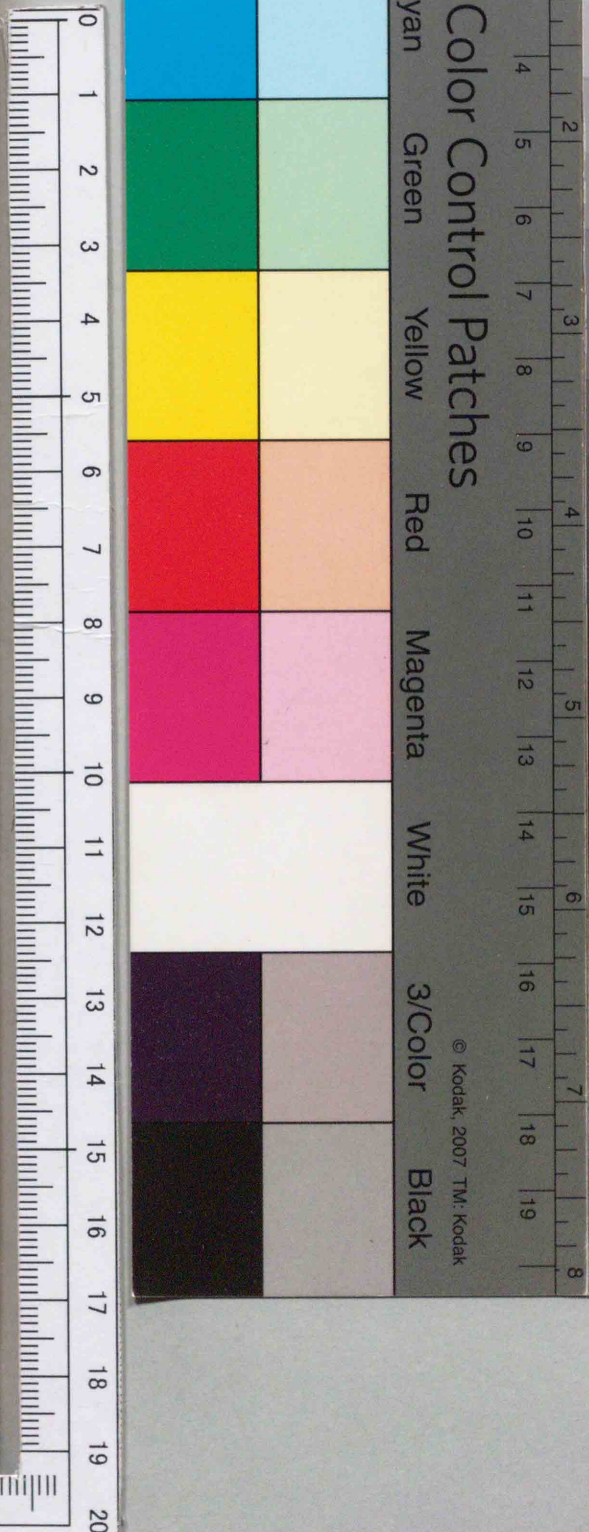


© Kodak 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak 2007 TM: Kodak



375.9
Sa 19
資料室

新撰國語讀本

昭和二年版

卷二



資料室

濟定檢省部文

日五月七年八和昭 日十月二年七和昭  
用科語國校學業實 用科文漢語國校學中

375.9  
5219

# 新撰國語讀本

(昭和二版)

## 卷二



文學博士

佐々政一編

文學博士

武島又次郎  
菅川種郎補  
杉敏介



## 凡例

- 一、本書一部十卷は、故佐佐政一編、新撰國語讀本を、最近改正された中學校教授要目に準據して新に補修したものである。
- 一、本卷は第一學年の後期用たるべきもので、現代文を主とし、平易なる近世文を交へ、更に漢文の入門に資すべき教材を加へた。
- 一、近世文にあつては、助動詞の「む」を「ん」に改めずを示した。
- 一、所收の各篇は悉く知名の人の作品で、何れも文章の模範たるべきものである。但し或作品はその全文を掲げることが出来ないで、抜萃したのもあり、一部分を削除したのもある。又文字、辭句も、普通教育上の見地から、多少原作と違へたところもある。此等は總てその篇の終りに「による」の三字を添へたが、その責任は、勿論補修者の負ふべきものである。
- 一、作品の採録に就き快く承諾された各位に對して、茲に敬意を表し、併せて種種の注意と助言とを與へられたことを感謝する。



目次

一	ことばの話	四
二	屋根	二
三	お母さん	一五
四	歸郷(詩)	二六
五	奈良二題	三〇
	一、御所柿	三〇
	二、法隆寺の鐘	三〇
六	渡り鳥	三六
七	目かくし	三七
八	乙寶寺の塔	三七
九	夢	三五
△一〇	橋の上	七一
△一一	伊達政宗の膽氣	八一
△一二	競争と科擧	八六
〇一三	高瀬舟	一〇〇
	森鷗外	一〇〇
	夏目漱石	三五
	相馬御風	三七
	里見弴	三七
	薄田泣菫	三六
	高濱虚子	三〇
	正岡子規	三〇
	尾崎喜八	二六
	芥川龍之介	一五
	志賀直哉	二

古

△一四	篤實	二九
一五	執心の戒	二七
一六	愛國心	三五
一七	我不關焉	四三
	○ 旅の歌(和歌)	五三
一八	文 字	五三
一九	漢語と漢文	一六〇
二〇	諺言四束	一六八
二一	訓話二篇	一七〇
	一、否の一語	一七〇
	二、勤勉と耐久	一七三
二二	雛僧三條	一七五
二三	學訓三則	一七八
二四	俚諺抄	一八〇
	附錄 同字表・宛字表・國字表	一五



一 ことばの話

不思議なもの、ことばの變遷である。我が國の言語は、二千年に近い記録を存してゐて、世界で頗る古い言語の一つである。而も萬世一系の帝室を戴いた、同一民族の間にのみ發達したもので、今から約一千年前の作といはれる「竹取物語」や「伊勢物語」を見ても、半分以上は今日も平生使用してゐる言語で書いてある。こんな國は、言ふまでもなく、世界に又とはないのである。併し、何分にも二千年に及ぼうとする程の長い年月を経てゐるから、同じ言語でも、その意味の著しく變化したものが少なくない。

共に平安朝時代の作であるが、著者は詳かでない。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

「いへ」といふ語は、昔は家族とか家庭とかいふ意味で、随つて「いへあるじ」といへば、一家族中の主長、即ち戸主の意味であつた。然るに、今日では「いへ」といふと、家屋即ち建築物の意味で、「いへぬし」は貸家の所有者の義に用ひられてゐる。

我が國で未だ立派な陶磁器の出來ない頃、支那から渡つて來た上等の陶磁器は、専ら茶湯の席ばかりに用ひられたから、これを茶碗といつたのである。然るに、我が國で硬い上等の陶磁器が澤山に出來るやうになると、飯を食ふにも、番茶を飲むにも、陶磁器を用ひるやうになつた。そこで、飯食茶碗といふやうな不思議な言葉が出來た。今日

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



では、珈琲茶碗とさへ言つてゐる。茶を飲むのが茶碗なら、飯を食ふのや、珈琲を飲むのは、飯碗、珈琲碗と言ひさうなものだが、さう理窟通りに行かないのが言葉である。

「さかな」とは、本來、酒を飲む時に食ふ物といふ意味の言葉である。さかは酒樽、酒杯の「さか」である。なは何でも副食物にするもの。古は野菜類は勿論皆「な」であつたし、昆布や若布などのやうな食べられる海藻も、皆磯菜と**いふ**言葉は、これから來てゐる。然るに、酒といふものは、上戸

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

即ち上等の家でなくては飲用しなかつたし、且つ酒を飲む時は、贅澤な副食物を求めることが普通であつたので、自ら魚類は酒席に多く供せられて、「さかな」といふ異名を得るやうになつたのである。既に魚類を「さかな」といふことに定まつて了ふと、下戸即ち酒の飲めない人が食つても、やはりこれを「さかな」といふのだから奇妙である。

又、言葉は使つてゐるうちに段段下落するものが多いやうである。例へば、大工といふのは、工即ち工**匠**家中の俊秀な者の尊稱で、多くの少工どもの頭領を呼ぶ名であつた。然るに、今日では、建築事業にたづさはる者は、小屋掛の叩き大工でもやはり大工である。かの頭領親方なども同

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



様で、今日では、一人も手下や子分のない者でも、印袴纏さへ著けてゐれば、即ち親方であり、頭領である。この言葉の下落について面白い歴史のある言葉がある。それは女房臺所などといふ類の言葉である。

抑、女房とは女の部屋といふ意味で、昔朝廷には澤山の女房があつて、その一房を拜借して、一兩人の下婢を使つて、宮仕へしてゐる女を女房と稱へたのである。そこで、何事にも朝廷の眞似をした公卿の家でも、奥女中の身分あるものを、やはり女房と稱へた。然るに、武士が京都で勢力を得て、朝廷に仕へてゐる女房、又は攝關の家の女房などを、妻に娶るやうになると、何時しか武家の妻女のこととも、

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

女房と呼ばれるやうになつた。これが何時しか更に下下にまで濫用され、裏店にも櫛卷の女房が出来て、女房が臺所で唶鳴つたり、時には八百屋の荷さへ覗いて見るといふやうな姿になり下つたのである。

さて、女房が武家の家庭に入込むと、朝廷や公卿の家で用ひた言葉が、新家庭に於ても用ひられた。まづ臺所といふのは、臺盤所のこと、臺盤といふ大きな御膳様の物を始め、食事の道具などを置いて、御膳立をする場處であつて、平生は女房衆の詰所であつたが、これが遂には、鍋釜や香の物の尻尾の狼藉たる、流し元の意味にまで下落して了つたのである。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



「うち」といひ、里といふ言葉、これも女房言葉である。うちとは本來禁裏のことで、里とは大内以外の町家の義である。女房は、自分の御奉公してゐる禁裏を「うち」といひ、自宅のことを里と云つてゐた。それが女房達の新家庭に轉用されて、生家のことを里といひ、里歸りとか、親里とかいふ新熟語が作り出されると、夫の家は「うち」で、夫は「うちの」と呼ばれるやうになつた。

最後に、故意に轉訛させられた言葉について、一二の例を示さう。言語の變遷は大抵自然のものであるが、古來、色を迷信などから、人爲的に變造された語が少なくない。例へば、海邊に生えてゐる蘆といふ草を「悪し」と聞える

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

古、歴代の天皇の御一代毎に、伊勢大神宮に奉仕させるために遣はされた未婚の皇女、若しくは女王。

本文は編者佐佐政一の作、醒雪遺稿に收めてゐる。

云つて、わざと葎たと呼びかへたり、四の音を忌んで「よ」といつたり、梨を「ありの實」硯箱を「あたり箱」鯛を「あたりめ」といつたりする類が、それである。古も、伊勢の大神宮に御奉仕になる齋宮\*の御所では、髪のない僧侶のことを「わざと」髪長\*といつた例もある。

要するに、言語界の不思議な現象は、同一の語が、例へば「ありのみ」といつて「なし」を表はすやうに、正反對の意味にさへ用ひられるのであるから、その變化は蓋し窮まる所がないといふのが至當であらう。若しも古今東西幾百千年に涉つた言語の中から、様様の類似を求めて研究したならば、隨分興味深い歴史が出来るであらう。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



## 二 屋 根

四つか五つか忘れたが、ともかく秋の夕方の事だつた。私は人人が夕餉ゆゆうの支度で忙しく働いてゐる隙に、手洗場の屋根へ懸けすててあつた梯子から、誰にも氣づかれずに、一人母屋おもやの屋根へ登つて行つた事がある。棟傳むねつたひに鬼瓦の處まで行つて、馬乗りになると、變に快活な氣分になつて、私は大きな聲で唱歌を唄つてゐた。私としては、こんな高い處へ登つたのは初めてだつた。普段下からばかり見上げてゐた柿の木が、今は足の下にある。

西の空が美しく夕映えてゐる。鳥が忙しく飛んでゐる。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

.....

間もなく私は、

「謙作。——謙作。」と、下で母の呼んでゐるのに氣がついた。それは氣味の悪いほど優しい調子だつた。

「あのね、其處にちつとしてゐるのよ。動くのぢやありませんよ。今山本が行きますからね、其處におとなしくしてゐるのよ。」

母の眼は少し釣上つて見えた。甚ひく優しいだけ、徒事たごでない事が知れた。私は山本の來るまでに降りて了はうと思つた。そして、馬乗りのまま、少し後すざつたじさつた。

「ああつ！母は恐怖から泣きさうな表情をした。謙作は

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



おとなしいこと。お母さんの云ふ事をよくきくのね。  
 私はちつと眼を放さずにある。變に鋭い母の視線から縛られたやうになつて、身動きが出来なくなつた。  
 間もなく、書生と車夫との手で、私は用心深くおろされた。案の定、私は母から烈しく打たれた。母は興奮から泣きだした。

母に死なれてから、此の記憶は急にはつきりして來た。後年も、これを憶ふ度に、いつも私は涙に誘はれた。何といつても、母は本統に自分を愛してゐてくれた。私はさう思ふ。  
 (志賀直哉著「暗夜行路」)

志賀直哉 小説家。學習院を経て、東京帝國大學文學部に學んだ。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

### 三 お母さん

八歳か九歳かの時、兎に角どちらかの秋である。陸軍大將の川島は回向院(回)の濡佛(ぬぼつ)の石壇の前に佇みながら、味方の軍隊を檢閲した。尤も、軍隊とは云ふものの、味方は保吉とも四人しかゐない。それも、金釦(かね)の制服を著た保吉一人を例外に、あとは悉く紺飛白(こんとびしろ)や盲縞(めいこう)の筒袖(つつそで)を著てゐるのである。

これは勿論、國技館の影の境内に落ちる回向院ではない。まだ野分の朝などには、鼠小僧の墓のあたりにも、銀杏落葉の山の出来る、二昔前の回向院である。妙に鄙びた當

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

東京市本所區兩國橋の近くにある寺院。

回向院に隣つて建てられてゐる大相撲競技場。明治四十二年完成。  
 江戸時代の末に現れた江戸の大賊。天保三年(一八五二)死刑、年三十七。



今は東京市の一區名。

時の景色——江戸と云ふよりも、江戸の外れの本所と云ふ當時の景色は、とうの昔に消え去つて了つた。併し、ただ鳩だけは同じことである。いや、鳩も違つてゐるかも知れない。その日も、濡佛の石壇のまはりには、殆ど鳩で一杯だつた。が、どの鳩も今日のやうに小綺麗に見えはしなかつたらしい。門前の土鳩を友や檣賣り——かういふ天保の俳人の作は、必ずしも回向院の檣賣りをうたつたものとは限らないであ



佛濡の院向回

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

らう。それでも、保吉はこの句さへ見れば、いつも濡佛の石壇のまはりにごみごみ群がつてゐた鳩を——喉の奥にこもる聲に薄日の光を震はせてゐた鳩を、思ひ出さずにはゐられないのである。

鑢屋の子の川島は、悠悠と検閲を終つた後、盲縞の懷から、ナイフだの、バチンコだの、ゴム鞆だのと一緒に、一束の畫札を取出した。これは駄菓子屋に賣つてゐる行軍將棋の畫札である。川島は彼等に一枚づつその畫札を渡しながら、四人の部下を任命した。此處にその任命を公表すれば、桶屋の子の平松は陸軍少將、巡查の子の田宮は陸軍大尉、小間物屋の子の小栗は唯の工兵、堀川保吉は地雷火で

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



ある地雷火は悪い役ではない。ただ工兵にさへ出合はな  
ければ、大將をも俘とらに出来る役である。保吉は勿論得意だ  
つたが、圓圓と太つた小栗は、任命の終るか終らないのに、  
工兵になる不平を訴へ出した。

「工兵ぢやつまらないなあ。よう、川島さん。あたかも地雷  
火にしておくれよ。よう。」

「お前は何時だつて俘になるぢやないか。」

川島は眞顔にたしなめたけれども、小栗は眞赤になり  
ながら、少しも怯おそまずに云ひかへした。

「嘘うそをついてゐらあ。この前に大將を俘にしたのだつて、  
あたいちやないか。」

「わたくしから詛  
つた言葉。」

「さうか。ぢや、この次には大尉にして遣る。」

川島はにやりと笑つたと思ふと、忽ち小栗を懐柔した。  
保吉は、今だに、この少年の悪智慧の鋭さに驚いてゐる。

「開戦！」

この時、かういふ聲を擧げたのは、表門の前に陣取つた、  
やはり四五人の敵軍である。敵軍は、今日も辯護士の子の  
松本を大將にしてゐるらしい。紺飛白の胸に赤シャツを  
出した、髪かみの毛を分けた松本は、開戦の合圖をするためか、  
たかだかと學校帽を振廻してゐる。

「開戦！」

畫札を握つた保吉は、川島の號令のかかると共に、誰よ

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



りも先へ吶喊した。同時に、又靜かに群がつてゐた鳩は、夥しい羽音を立てながら、大まはりに中空へ舞上つた。それから……それからは未曾有の激戦である。硝煙は見る見る山をなし、敵の砲彈は雨のやうに彼等の周圍へ爆發した。併し、味方は勇敢にじりじり敵陣へ肉薄した。尤も、敵の地雷火は凄じい火柱を上げるが早い。か、味方の少將を粉微塵にした。が、敵軍も大佐を失ひ、その次には又保吉の恐れる唯一の工兵を失つて了つた。これを見た味方は、今までよりも一層猛烈に攻撃を續けた。……と云ふのは、勿論事實ではない。ただ保吉の空想に映じた、回向院の激戦の光景である。けれども、彼は落葉だけ明るい物さびた境内

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

を駈廻りながら、ありありと硝煙の匂を感じ、飛違ふ砲火の閃きを感じた。いや、或時は、大地の底に爆發の機會を待つてゐる、地雷火の心さへ感じたものである。かういふ潑刺とした空想は、中學校へはひつた後、いつの間にか彼を見離して了つた。今日の彼は、戦ごつこの中に旅順港の激戦を見ないばかりではない。寧ろ旅順港の激戦の中にも戦ごつこを見てゐるばかりである。併し、追憶は幸にも少年時代へ彼を呼返した。彼はまづ、何を措いても、當時の空想を再びする無上の快樂を捉へなければならぬ。――硝煙は見る見る山をなし、敵の砲彈は雨のやうに彼等の周圍へ爆發した。保吉はその中を一文字に敵の大將へ

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



飛懸つた。敵の大將は身を躲すと、一散に陣地へ逃込まうとした。保吉はそれへ追繼つた。と思ふと、石に躓いたのか、仰向けに其處へ轉んで了つた。同時に、又勇しい空想も石、鹼玉のやうに消えて了つた。もう彼は光榮に満ちた一瞬間前の地雷火ではない。顔は一面に鼻血に塗れ、ズボンの膝は大孔のあいた、帽子も何もない少年である。彼はやつと立上ると、思はず大聲に泣き始めた。敵味方の少年は、この騒に折角の激戦も中止したまま、保吉の周圍へ集まつたらしい。やあ負傷した。と云ふ者もある。仰向けにおなりよ。と云ふ者もある。おいらのせめぢやなあい。と云ふ者もある。が、保吉は、痛みよりも、名狀の出来ぬ悲しさの爲に、二

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

の腕に顔を隠したなり、愈懸命に泣きつづけた。すると、突然、耳元に嘲笑の聲を擧げたのは、陸軍大將の川島である。「やあい、お母さんつて泣いてゐやがる！」川島の言葉は、忽のうちに、敵味方の言葉を笑ひ聲に變じた。殊に大聲に笑ひ出したのは、地雷火になり損つた小栗である。

「可笑しいな。お母さんて泣いてゐやがる！」けれども、保吉は泣いたにもせよ、お母さんなどと云つた覚えはない。それを云つたやうに誣ひるのは、いつもの川島の意地悪である。——かう思つた彼は、悲しさにも増した口惜しさに一杯になつたまま、更に又顛へ泣きに泣

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



きはじめた。併し、もう意氣地のない彼には、誰一人好意を示す者はゐない。のみならず、彼等は口口に川島の言葉を眞似しながら、ちりぢりに何處かへ駈出して行つた。

「やあい、お母さんつて泣いてゐやがる！」

保吉は、次第に遠ざかる彼等の聲を憎み憎み、いつかまた彼の足元へおりた無数の鳩にも目をやらずに、永い間、啜泣をやめなかつた。……

保吉は、爾來、この「お母さん」を、全然川島の發明した嘘とばかり信じてゐた。ところが、ちやうど三年前、上海へ上陸すると同時に、東京から持越したインフルエンザの爲に、或病院へはひることになつた。熱は、病院へはひつた後

支那の揚子江口にある港。  
流行性感冒。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

芥川龍之介 小説家。東京の人。東京帝國大學文學部出身。昭和三年歿。年三十六。

も、容易に彼を離れなかつた。彼は白い寢臺の上に朦朧とした目を開いたまま、蒙古の春を運んで来る黄沙の凄じさを眺めたりしてゐた。すると、或蒸暑い午後、小説を讀んでゐた看護婦は、突然椅子を離れると、寢臺の側へ歩み寄りながら、不思議さうに彼の顔を覗き込んだ。

「あら、お目ざめになつて入らつしやるんですか。」

「どうして。」

「だつて、今お母さんつて仰しやつたぢやありませんか。」

保吉はこの言葉を聞くが早いか、回向院の境内を思ひ出した。川島も或は意地の悪い嘘をついたのではなかつたかも知れない。(芥川龍之介著「黄雀風」による)

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



四 歸 郷

停車場を出て

土産の買物の包を小脇に

無味殺風景な白茶けた道を

足ばやに汗になつて

とうとう此の丘の上に立つ

ああ緩やかにうねる並木路のはづれ

高く青青と

海角に寄せて碎ける大波のやうな

一塊の森の頭

あれこそ私の住む村だ

何といふ美しい村だらう

何といふ木立に恵まれた村だらう

七月の夕暮の空は

薄紫の晶玉の清らかさで

朱鷺あかさぎの脱毛カケヒのやうな細い雲が

すらすらと

軽い模様を描いてゐる



私が其處の家につく頃には  
 水の垂れさうなあ空へ  
 宵の明星がたつた一つ  
 ぴかりと  
 金の印璽を捺すのだ  
 さうすると  
 村中が柔かい深深とした蔭に満たされ  
 月見草と小川とだけが闇に浮き  
 家や庭などは  
 咲亂れた星の花の下で

ただ地上の小さな燈火の  
 光ばかりになつて了ふだらう  
 其處へ歸つて  
 水を汲みあげ  
 汗をさらさらと流し去つて  
 さてこの包を解くのだ  
 ああそのわが村わが家が  
 向うに見える (尾崎喜八)

尾崎喜八 詩人  
 京華商業學校出身



五 奈良一題

一、御所柿

(一) この年の四月、正岡子規は「日本」新聞の従軍記者として遼東半島に渡つたが、五月歸朝の途に上り、船中で發病し、神戸に上陸すると同時に神戸病院に入った。七月末に退院し、須磨保養院に移つて、八月末、郷里松山に歸つた。

明治二十八年、神戸の病院を出て、須磨や故郷とぶらついた末に、東京へ歸らうとして、大阪まで來たのは十月の末であつたと思ふ。その時は腰の病の起り始めた時で、少し歩くのに困難を感じたが、奈良へ遊ばうと思つて、病を推して出かけて行つた。三日ほど奈良に滞留の間は、幸に病氣も強くならぬので、余は面白く見る事が出來た。この時は、柿が盛んになつて居る時で、奈良にも、奈良近邊の村にも、柿の林が見えて、何とも言へない趣であつた。柿など

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

(二) 子規が勉學のために故郷を出て始めて上京したのは、明治十六年六月であつた。

(三) 五彩の模様を描いた染附の磁器。

といふものは、從來詩人にも歌よみにも見離されてゐるもので、殊に奈良に柿を配合するといふやうな事は、思ひも寄らなかつた事である。余はこの新しい配合を見つけて、出して、非常に嬉しかつた。

或夜、夕飯も過ぎて後、宿屋の女中に、「まだ御所柿は食へまいか。」と聞くと、「もうあります。」といふ。余は國を出てから十年程の間、御所柿を食つた事がないので、非常に懐しかつたから、早速澤山持つて來いと命じた。やがて、女中は直径一尺五寸もありさうな錦手の大井鉢に、山の如く柿を盛つて來た。流石柿好きの余も驚いた。それから、女中は余のために、庖丁を取つて、皮をむいてくれる様子である。余

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



は柿も食ひたいのであるが、併し暫しの間は、皮をむいて  
 ゐる女中のやや俯向いてゐる顔を見てゐた。この女中は、  
 年は十六七位で、色は雪  
 の如く白くて、目鼻立ま  
 で申し分のないやうに  
 出来てゐる。生れは何處  
 かと聞くと、月瀬のもの  
 だといふので、余は梅の  
 精靈でもあるまいかと思つた。  
 やがて柿はむけた。余がそれを食うてゐると、女中は更  
 に他の柿の皮をむいてゐる。柿も旨い、場處も好い。余がう



(池の潭猿)景風良奈

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

〔二〕 奈良縣添上郡月瀬村。梅花の名所。

華嚴宗の大本山。これを俗に奈良の大佛といふのは、その本尊金銅盧舍那佛の大像をさすのである。天平年中に聖武天皇の本願によつて建立されたものである。

つとりとしてゐると、ぼおんといふ釣鐘の音が一つ聞えた。女中は「おや、初夜が鳴る。」というて、まだ柿の皮をむきつづけてゐる。余には、この「初夜」といふのが非常に珍しく面白かつたのである。  
 あれはどこの鐘かと聞くと、東大寺の大釣鐘が、初夜を打つのであるといふ。東大寺がこの頭の上にあるのかと尋ねると、すぐ其處ですといふ。余が不思議さうにしてゐたので、女中は室の外の板の間に出て、其處の中障子を明けて見せた。なるほど、東大寺は自分の頭の上に當つてゐる位である。何日の月であつたか、其處らの荒れた木立の上を寂しさうに照らしてゐる。女中は更に向うを指して、

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



正岡子規 俳人、  
歌人。名は常規。  
愛媛縣の人。東  
京帝國大學文學  
部に學んだ。明  
治三十五年歿、  
年三十六。

\*奈良縣生駒郡法隆寺村にある法相宗の大本山である。推古天皇の十五年に開かれたもので、現存する我が國の寺院中最古のものである。

「大佛のお堂の後の、あそこの處へ来て、夜は鹿が鳴きますから、よく聞えます。」と話してくれた。(正岡子規著「子規全集」)

二、法隆寺の鐘

山門をはひると、すぐ右側に、寫眞や、寶物の説明や、くさぐさのものが並べてあり、蒲團を掛けた小さな猫火鉢が置いてあつて、人は居らぬ。案内者が「八さあん」と呼んだが、返事がない。鐘がごおんと鳴る。案内者は黙つて猿臂を延ばして、戸棚の横から長い鍵を出して、私どもの前に立つた。

私どもは、塔を見上げ、山門を見返りつつ、その後について行く。案内者は金堂の横の扉に鍵を突込んで、こつこつ



法隆寺



とこねくるが、どうしても開かない。鐘がごおんと鳴る。案内者は、鍵を突込んだままにして置いて、鐘樓の方へ行く。見ると、二階建のやうになつてゐる鐘樓の下に、袴とも腰衣ともつかぬやうなものを、腰に纏うた一人の男が、長い綱を持つて立つてゐる。私どもは案内者の後について行く。男が綱を弛めたと見ると、鐘がごおんと鳴る。

「八さん、あけておくれ。わたしがその間撞いてゐるから。」と案内者は代つて綱を持つた。寺男は黙つて綱を渡して、金堂の方に走つて行つた。案内者は一二三四と、口のうちで撞木の揺れる數を數へて、五つ目に綱を弛める。さうすると、撞木が鐘に當る。ごおんと鳴る。嘗て、佛蘭西から日本

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



の美術を調べに来てゐた人が、特にこの寺の鐘を賞讃してゐた事を憶ひ出す。見上げると、他の寺の鐘樓とは違つて、鐘は露出してゐない。薄暗い處に、細長い形をした、餘り大きくない鐘の、青錆が品よく古色を呈して著いてゐるのが、窓から射し入る光線で、朧げながら見える。撞木が鐘に當ると、ごおんごおうごおうごおうと、靜かに遠くへ傳はる響にも、上代の音がある。私は堪らなくなつて、

「どうか、私にも一度撞かしてくれないか。」と案内者に頼んで、教はるままに、一二三と數を繰りつつ、五つ目に大きく引いて、綱を放した。撞木が當るには當つたが、辛うじて音を發したばかりで、涼しい清い音は出なかつた。残念に

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

思つて、今一度と、數を繰つて、又綱を弛めた。前のよりは幾らか好い音が出たが、それでも、心耳を澄ます音ではなかつた。同行の友が、

「私にも一つ撞かしてくれ。」と、綱を持つて撞いた。同様に力のない響であつた。漸く金堂を開けた寺男が歸つて來て、

「そんな撞きやうをしては困りますな。」といつて、綱を取つて、代つて撞いた。鐘の音は再び澄んだ力のある音に返つた。

私どもの撞いた鐘の音を、法隆寺の村人は何と聞いたらう。田を耕しながら、その力のない音に耳をそばだてて、

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



高濱虚子 俳人  
本名は清。第三  
高等學校に學ん  
だ。正岡子規等  
と共に所謂ホト  
トギス派の大家  
として知られて  
ゐる。

佛力の俄にかくも衰へたかと、定めし驚いたことであつたらう。けれども、それはただ三撞であつた。四撞目には再び元の澄んだ音に戻つて、天日は舊の如く明かになつた。ああ、この靈鐘を瀆した罪は深い。けれども、法隆寺始まつて以來、佛法の滅びるまで、この寺の鐘は何萬遍鳴ることであらう。何億遍鳴ることであらう。何萬遍でも、何億遍でもよい。そのうちの二遍だけは、私が撞いた鐘の音だと思ふと嬉しい。若し、次の世に、この罪深い私が、萬萬一にも佛の國に生れるやうなことがあるならば、それは確にこの二撞の音に因るものと思はれる。

この村は砧も法の響かな

(高濱虚子の文による)

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

### 六 渡り鳥

私どもが七つ八つの頃には、そろそろ秋が更けて來ると、晴れきつた空を毎日のやうに雁が渡つた。私どもはそれを見かけると、吹きさらしの野路に立つて、空の一方を仰ぎ見ながら、

雁よ雁よ棹になれ

棹になつたら鉤になれ

と、その長い列が次第に雲の中ににじみ込んで了ふまで、聲を噎らして叫んだものだ。けれども、何時の間にか雁も少なくなつて、今では晝間その長い列が空を渡るといつ

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



たやうなことは、よくよく人氣の遠い野原か何處かでないと、滅多に見られなくなつた。

その頃は、また後の岡に往つて見ると、葉の落ちかかつた雑木林に、渡り鳥がどつさり來てゐたものだ。渡り鳥といふと、私は、海を越えて來る、あの小つぼけな旅人の、あわただしい生活を考へて、何時も言はうやうのない寂しい旅心地を覺える。

渡り鳥の初客と言つたら、まづ百舌とでも言つて置かうか。秋の彼岸が過ぎて、そろそろ日影が黄色がかつて來ようといふ頃、私どもは、何うかすると、暖かい日の午後、こちらの木立で、甲の、高い、鋭い、聲を聞くことがある。ああ、も

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

う秋だな」と、思はず振返ると、背の低い櫟に交つて、ずばぬけてひよろ高い楡の木に、百舌が一羽止つて、黄色い夕日をうけて、羽莖が金のやうにきらきらしてゐるのが見える。私どもは、その瞬間、言はうやうのない強い健かな氣持が脈を流れるのを覺える。

百舌の次には、鶉が來る。山家の晝過ぎ、ものうさうな蟋蟀の聲も何時の間にか鳴きやんで、枯葉ひとつが寝返りを打つ音までも、はつきりと耳に入る。静けさの底に、思ひ寢れのした溜息とでも言つたやうな、微かな聲が洩れて來て、何の音とも判らない。すると、樹蔭の、葦、か何處かで、餘念もなくせつせと仕事に精を出してゐた農夫が、ひよ

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



いと顔をあげる拍子に、すぐ鼻先の小枝から、枯葉のやうな小鳥が身を逸らして逃げて往つて了ふ。——それが鶉だ。

鶉といつたら、まるで悲哀でも抱いてゐる人のやうに、大抵は連にはぐれて、ただ獨りで出て来る。そして、そこらの小枝に止るなり、何か目に見えぬ昔馴染をでも招くやうに、ひよくりひよくりと軽いお時儀をして、ささやくやうな聲で歌ひ出す。私はそれを見ると、人のため世の中のためと言つたやうな理由でなく、自分一人のために歌つて、それで満足してゐる人たちを思ひ出さずにはゐられない。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

(一) 鶉のたまご、  
(二) 蟲の巢。

鶉が来て物の十日も経たぬ間に、四十雀が来る。この鳥は鶉と違つて、十羽も二十羽も群をなして来る。山から里へ移る折などには、恰も時雨でも襲つて来るやうに、細かい羽音がさつと空を掠めて聞える。そこらの木立におりるなり、目まぐるしい程すばしく、蝶蛸や雀鸞を啄き廻しながら、鼠色の背を反らし、柔かみのある胸の圓みを見せて、透きとほつた銀の鈴を振るやうな聲で、早口に喋舌くり續ける。かうした大層な群の中には、きつとまだ羽の伸びきらない、灰色の生毛そのままの雛つ兒が交つてゐて、何うかすると、高い枝に止り損なつても、んどり打つて宙に返ることもあるが、そこはまた馴れたもので、いきな

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



りひよいと下枝に掴まつて、ませた身ぶりで樹肌の裂目を啄いたりなどする。まるで、山家育ちのすばしこい、きさくな子どもを見るやうな氣持だ。

小雪がちらつく頃になると、鷓鴣が来る。これは鷓鴣と同じやうに、大抵は獨法師で、それもこつそりと、あたりを忍ぶやうにして来る。冬の始の晝過ぎ、山近い田舎の小家で、爺さんは炬燵に寄りかかつて、こつくりこつくりと轉寢をする。その側で、婆さんはせつせと絲車を繰つてゐる。煤けた障子に、檐に吊した干菜の影が見すばらしく映つて、時折ちつぽけな小鳥の影がちらつく。何うかして絲目が切れて、睡さうな錘の音がぱつたり止むと、かさかさど干

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

作者は岡山縣淺口郡連雀町の出身。

陰曆十月の節日の名。十月の亥の日。の亥の刻に餅を食ふと、萬病を除くといふので、昔は上下一般にこの日を重んじた。

菜をむしる音がする。が、老人の耳にそんな音の聞取れよう筈がない。婆さんは俯向いたまま、また絲を紡ぎにかか。る。さうかうする間に、鳥は舌打をするやうな聲を立てながら、ひよいひよいと小刻みに柴垣を傳つて、隣から隣へと、狭つ苦しい物蔭を出たりはひつたりして、移つて行くのだ。渡り鳥の往來といふことに餘程興味をもつた人でない、何うかすると、かうした鳥の消息は、つい氣がつかずに一冬を過して了ふことがある。

鷓鴣と後先になつて、頬白が来る。私どもの郷里では、亥子になると何時も頬白が来ると言ひ傳へてゐる。冷たい雨のびしよびしよと降る中に、獨者の頬白が、灰色の胸ま

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



でぐしよ濡れになつて、しよんほりとそこらの木に止つてゐるのを見ると、私の國では、この鳥の鳴き聲を解いて、  
一筆啓上つかまつる

子ども泣かすな火の用心

今度のたよりに金十兩

遣りたいけれど一文も御座なく候

といひ傳へてゐるのを思ひ出して、しみじみと、世渡りのむづかしさと、旅心の寂しさを思はぬ譯には行かない。後の雑木林にこんな小鳥が来る頃になると、野らにはもうそろそろ鶉が來、鶉が來てゐる。(薄田泣菫著「泣菫文集」による)

薄田泣菫 詩人、  
隨筆家。本名は  
淳介。永らく大  
阪毎日新聞社員  
であつた。



人が = いざさそみ ハ ろじほほ ロ すも イ  
ぎしチ らづう ト らかふじし へ きたひ ホ



七 目かくし

干ればぬら土と砂と半分半分の床を見せ、満ちきれば  
石垣三四段を浸す程の小川に沿つて、申し合せたやうに  
東北へかしいだ松並木が、自然のまま庭先に取込んであ  
つた。もつくり小高くなつた松の根方には、沿階草や山露  
などが、昔を語り顔に生ひ茂つてゐたが、そこから縁先ま  
ではよく手入れの届いた芝生で、木の間葉の間を洩れた  
秋の陽の光が、鮮かな明暗の斑を描いてゐる。音とも云へ  
ぬ程に葉末が微風に鳴つて、時時はらはらと赭くなつた  
のが、こぼれ落ちて来る……



そこに昌造は、長閑な心持で、二人の男の子たちの相手になつてゐた。一人一脚二人三脚、そんなことを教へてみたが、年齢が年齢ゆゑ、まだ少し無理で、さうまた面白がりもしなかつた。

「<sup>下付</sup>ぢや今度は、<sup>しん小中</sup>盲鬼つてのを教へてやらうか。」

ひと憩みしてから、ふと思ひついて、今まで足を結はくのに使つてゐた手拭を、ばたばたと振ひながら立上ると、

「昌一君、さきに鬼にならないか。」

「僕、いやだ。」

「なぜさ。」

「いやだよ、暗いからいやだ。」

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

「暗い……それあ目を結はけば、見えなくなるなあ解りきつてるけれど……ぢや欽造君、鬼になれよ。」

「僕もいやだ。」

「だめだな、二人とも、弱蟲で……ぢやヂヤンケンボンで鬼をきめようかね、それがいいや。」

と云つたが、気がつくくと、まだその拳の勝負さへ、はつきりとは嘸<sup>のふ</sup>込<sup>め</sup>めてゐない子供たちだつたが、それでも掛聲だけは勇しく、

「ヂヤン、ケン、ボン。」

と、出したのが、兄は鋏で、弟の方は石だつた。それを、相手と違つたのに気がつくくと、大急ぎで弟も、さもむづかしさう

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



に二本の指を延ばしたりして、同じ鉞に變へて了ふくら  
みの無邪氣さに、

「よしよしぢや、まあいいから、一番初めはパパが鬼にな  
つてやらう。」

ときりりと目をしばつたが、盲滅法追ひかけ廻して、子供  
たちの足でも踏んづけたりすると思ひ、兩方  
から手を把らせて、どこへでも、パパが見當がつかなくな  
るまで、あつちこつち引張り廻すんだ。」と教へながらも、一  
體本所のおいてきぼり」といふ遊戯は、それからさき何う  
するんだつたかしら、と、自分でもちつとあやふやだつた。  
それでも、子供たちが導くままに歩き廻つて、「おやおや、こ

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

こは何處だな、へんな處へ來たやうだぞ。」などと云つてや  
ると、二人は嬉しさうにくつくと忍び笑をした。

「まだだよ。まだ目かくし取つちやだめだよ。」

廣い芝生のこと、どこへ行かうが間違のありよう筈  
もないので、昌造は勇敢に闊歩した。

「やあ、今度はおうちの方へ向いてるな。どうだ、當つたら  
う。」

「だめよ、見ちや、ずるいや。」

「見えるもんかね。……おやおやおや、こいつは大變な處  
へ來たらしいぞ。」

下駄の下に芝生の感覺がなくなつたと思ふと、ごわご

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



わと山路の葉が鳴つた。

「こつちこつち。」

「こつちこつちもつとどんどん歩けよ。」

大よろこびで、兄弟してそんなことを云ひながら、川を見晴らす四阿あつまの裏手と覺しい方角へ引張つて行くので、

「おいおい、いやだぜ、もうぢき川ぢやないのかい。川ん中なんぞに、おつことしつこなしだぜ、いいかい。」

よもやそんな事をしようとも、出来ようとも思はないだけに、口ではそんな風に云つても、少しも索さぐり足などはせず、平氣で歩いてゐたが、そのままどんどん眞直に行くばかりなので、もう一度「おい、大丈夫かい。……」と念を押

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

しかけた途端に、空を踏んで、はつと思ふと、ぼしやんといふえらい水音だつた。

勢よく歩いてゐただけ、石垣をずりこけもせず、下駄もそつくり穿くいたまま、腿ひざきりの流の中に、ひよつこり突立つてゐる……。いつ二人の手を放し、目かくしを下へすつぽ脱いだか、まるつきりそんな覺えもなかつた。と、その瞬間に昌造の見たものは、上の子の顔だつた。なんと、かとも云ひやうのない、一つの深刻な表情だつた。驚愕、心配、後悔、謝罪、そんなもののどれ一つでもなく、ただめちやくちやに混亂した、複雑な、大人にも見たことがないほど緊張し切つた表情だつた。一旦は吃驚もしたが、すぐに、眞晝

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



間、しかも菊日和の煦煦たる陽の光の下で、著物や下駄の  
まま川の中に突立つてゐる自分自身の姿を、狐にでもつ  
ままれた男のやうに滑稽に感じて、もうちつとで爆發し  
かけてゐた笑が、それを見るなり、うつと止つて了つた。と  
同時に昌造の表情も一變した。殆どぞうつとした、と云つ  
てもいい程の感動を受けたのだから。

「おい！」

慍おこつたのでも、口惜しかつたのでもないのに、昌造の聲  
音には、へんにむきな調子がこもつた。

「なにするんだい！」

石垣の中途に片足かけて、ひよいと跳びあがらうとし

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

た時、いきなり、

「いやあ、いやいやあ。」

と、まるで氣でも狂つたやうに、昌一は兩手を振廻して打  
つてかかつたが、びしよ濡れになつた父親が岸に上つて  
立つたのを見ると、急にわつと聲をあげて、地べたに伏し  
て倒れ、手足をばたつかせて荒廻つた。

昌造には總てがよく解つた。何が「いや」なのか、よく解つ  
た。胸に抱きあげた手に、おのづとぎゆうつと力が罩ると、  
昌一の方でも、兩手で、力一杯頸つ玉にしがみついて來る。  
と思ふと、全く不意討の涙が、いきなり昌造の目の中一杯  
に盛りあがつてゐた。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



「よしよし。解つてる。解つてる。なんでもありやしないなだ。もういいから、おだまり、おだまり。」

云はれて昌一は、一段聲を張上げて泣喚いた。欽造は、さつきから、あつけにとられて、側に突立つてゐたが、その時これも、

「ババちやあん。」

と云ふなり、わつと泣きだして了つた。

喜怒哀樂のほかの「親」といふ感情だけで、昌造の心は、一杯はち切れんばかりになつて、頬りに頬を傳ひ落ちる涙を、どう處置しようとも、そんな事にはてんで氣もつかなかつた。  
(里見弴著「安城家の兄弟」による)

里見弴 小説家。本名は山内英夫。學習院出身。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

昔の國名。今の佐渡郡を除く外の新潟縣の地。

近年この名稱を改めて、國寶建造物と呼ぶこととなつた。

後陽成天皇から後水尾天皇に亘る御代の年號。(三十一、三十二)

### 八 乙寶寺の塔書取

私は先頃一つの面白い傳説を聞いた。それは越後の北蒲原郡の乙村きのこにある、乙寶寺といふ古刹に參詣した時のことであつた。その寺の本堂も有名であるが、その境内には、何とも言はれない好い形をした三重の塔がある。これは先年特別保護建造物として指定されて、殊に名高い立派なものである。私の聞いた面白い傳説と言ふのは、この三重の塔の建立に關して語り傳へられたものである。

この三重の塔の建立は慶長十九年の五月で、棟梁は京都の住人小島吉正といふ人であつた。塔の建築は、昔から

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



問題

一、小島吉正は何故工事  
半分に退出したか。  
昇怯下はなかりか。

二、下はどうかすれはす  
いか。

三、現代棟梁にこれ  
以上の昇怯な人  
はいるか。

四、何の目的で棟梁  
は海岸下を行ったか。

五、彼は幾度死な  
せし何故死ぬたか。  
存がたの下のありか  
やうか。



乙寶寺の三重の塔

最も困難な業の一つに數へられてゐるが、この乙寶寺の塔の建築でも、棟梁はその心を痛めつくした。どうにも工夫がつかなくなつた。彼は、絶望の極、工事半ばで到頭夜逃をして、了つた。棟梁はまづ暗い夜道を辿つて海岸へ出

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

六、三つの子供の遺体は  
どうして現れたか。  
存がたの下のありか  
やうか。

七、彼は子供の遺体  
のわづらひにさへたの  
ありますか。

八、この棟梁のやうに  
みづの底にミミに  
いり、いり、いり、いり、  
を思ふ事、何  
と言ふか、自分  
こんな経験が  
つたか、記せ。

込んで了はうかといふやうな、突詰めた考が幾度となく彼を襲つた。併し、彼はやはり死なれなかつた。彼はただ無茶苦茶に闇の中をさまよふのみであつた。自分の生命を打込んで、工事を半ばまで進めて來た三重の塔の失敗は、苟も藝術を自己の生命とする彼に取つては、正にこの世に於ける彼の滅亡に外ならなかつた。しかも、彼は何故かうしてその場を逃げだして來たか。それも反省する時、彼は我ながらその卑怯を叱責しないではゐられなかつた。自己に對する叱責は、やがて自己に對する憎悪であつた。けれども、彼はその叱責すべき自己、憎悪すべき自己を、闇の浪間に葬つて了ふには、猶そこに故知

11

10

9

8

7

6

5

4

3

2

1



れぬ恐怖があつた。さういふ矛盾した心の苦しみは、ただ徒に彼の心を狂はせ亂れさせるばかりであつた。今の彼の歩みは、全く狂へる者の歩みに外ならなかつた。彼の心は底知れず暗かつた。併し、天地の闇は、何時となしに、ほのぼのとした黎明の光に照らされ始めた。ほのかに明るみかけた大海の面では、まづ浪の穂の白さが、朝の光を受けた。やがて、彼の前には果てしもなげに續いた砂濱が見えて來た。光は刻一刻と地上の明るさを増して行つた。明けはなれて行く海には、光を歡ぶが如く、浪が小躍してゐた。浪間に浮ぶ鷗の胸は、銀色に輝いた。夜露にしつとりと濡れた砂濱に、長く長く續いた彼の足跡、無茶苦茶

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

に闇の中を歩いて來た彼自らの足跡、——それさへも今は朝の光に照らされて、一條の長い道となつて現れた。さうした朗かな黎明の天地の中に立つた彼は、今は何も彼もすつかり忘れ果てて、只陶然とその美に酔つた。倒れる如くに、彼は大地の上へ全身を投げだしたのであつた。それから幾時過ぎたか分らなかつたが、夢とも現ともなく、彼は耳元近くに、子供の楽しさうな笑ひ聲を聞いた。永い眠から覺めたやうに、彼はふらふらと起ちあがつた。と、朦朧とした彼の眼の前に、三人の子供が砂の上に坐つて、頻りに何かしてゐるのが現れた。何といふ譯もなしに、彼はその方へ吸寄せられた。子供達は遊に夢中になつて

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



みると見えて、彼の近寄つたことには少しも氣づかなかつたが、その刹那、あはれな建築師の疲れ果てた兩眼には、突如として不可思議な輝が現れた。死んだやうになつてみた彼の全身には、神祕的な生氣が充ち溢れた。

三人の子供は、礫を澤山拾ひ集めて来て、それを積重ね積重ねして、塔のやうなものを造らうとしてゐるのであつた。彼等は今や總てを忘れて、その事に全心を打込んでみた。甲が一つの礫を置くと、次に乙は他の一つの礫を積む。更に丙がそれに一つの礫を重ねる。代る代る彼等はそれを續けて、著著として或一つの形を組立ててみた。けれども、なかなか思ふやうには行かない。折角積んでゐるの

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

に、忽ち崩れて了ふ。併し、彼等は失望しない。崩れると、また始から積みなほす。幾度となく失敗し、幾度となく始める。飽くまで彼等は望を絶たない、倦まない、止めない。遂に一つの纏まつた塔の形を作り上げた。すると、彼等は共に手を拍ち、聲を揚げて喜んだ。さうして、更にその隣に、また新に礫を積み始めるのであつた。

さうした三人の子供の遊に、飽かず眺め入つてゐた彼は、そこに貴い何物かを獲得したやうな、決心に輝く面持を以て叫んだ。

「そこだ、その呼吸だ、その組方だ。」  
さう叫ぶや否や、彼は再び狂へる人の如く、もと來た道

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



へと駈戻つた。

かういふ事があつて漸く出来上つたのが、今日見るが如き、端嚴微妙の姿を備へた乙寶寺の三重の塔である、といふのが私の聞いた傳説の概略である。しかも傳説はそれに附加へて、その三人の子供は、大日堂の大日薬師彌陀の化身であつたといふのである。

「智慧は我等を子供に還す」とパスカルは言つた。私どもは更に「子供は我等を眞實の智慧に導く」と言ひたい。この乙寶寺の三重の塔の傳説は、私に貴い暗示を與へた。子供は佛の化身であつたといふその傳説の附會をも、私はそのまま受容れるに躊躇しない。(相馬御風著「野を歩む者」による)

\*Pascal.  
(1623-1662)  
フランスの幾何學者・哲學者。

相馬御風 文學者。本名は昌治。早稻田大學出身。暫く同大學講師であつたが、郷里に歸住して文筆に従事してゐる。

第三學期

九 夢

世の中が何となくざわつき始めた。今にも戦争が起りさうに見える。焼けだされた裸馬が、夜晝となく、屋敷の周圍を暴れ廻ると、それを、夜晝となく、足輕どもが犇めきながら追つかけてゐるやうな心持がする。それでゐて、家の内は森として靜かである。

家には、若い母と三つになる子供がゐる。父は何處かへ行つた。父が何處かへ行つたのは、月の出てゐない夜中であつた。床の上で草鞋を穿いて、黒い頭巾を被つて、勝手口から出て行つた。その時、母の持つてゐた雪洞の灯が、暗い



闇に細長く射して、生垣の手前現にある古い檜を照らした。  
 父はそれぎり歸つて來なかつた。母は、毎日、三つ現になる  
 子供に「お父様は。」と聞いてゐる。子供は何とも云はなかつ  
 た。暫くしてから「あつち。」と答へるやうになつた。母が「何日  
 お歸り。」と聞いても、やはり「あつち。」と答へて笑つてゐた。そ  
 の時は母も笑つた。さうして、今にお歸り。」と云ふ言葉を、何  
 遍となく繰返して教へた。けれども、子供は「今に。」だけを覺  
 えたのみである。時時は「御父様は何處。」と聞かれて、「今に。」と  
 答へる事もあつた。

夜になつて、四隣現が靜まると、母は帯を締めなほして、鮫  
 鞘の短刀を帯の間へ差しして、子供を細帯で背中へ背負つ

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

て、そつと潜りから出て行く。母は何時でも草履現を穿いて  
 ゐた。子供は、この草履の音を聞きながら、母の背中で寢て  
 了ふ事もあつた。

土堀の續いてゐる屋敷町を西へ下つて、だらだら坂を  
 降り盡すと、大きな銀杏がある。この銀杏を目標に右に切  
 れると、一町ばかり奥に石の鳥居がある。片側は田圃で、片  
 側は熊笹ばかりの中を、鳥居まで來て、それを潜り抜ける  
 と、暗い杉の木立になる。それから二十間ばかり敷石傳ひ  
 に突當ると、古い拜殿の階段の下に出る。鼠色に洗ひ出さ  
 れた賽銭箱の上に、大きな鈴の紐がぶら下つて、晝間見る  
 と、その鈴の傍に「八幡宮」といふ額が懸つてゐる。八の字が、

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



(一) 大名の家來の總稱で、「藩中」といふも同じい。  
(二) 約三厘四方の金色の板の中に、直径一厘許の小丸を描いた射的。

(三) 藁だけで製作した粗末な草履。

鳩が二羽向ひ合つたやうな書體に出來てゐるのが面白  
い。その外にも色色の額がある。大抵は家中(二)の者の射抜い  
た金的(三)を射抜いた者の名前に添へたのが多い。偶には太  
刀を納めたものもある。  
鳥居を潜ると、杉の梢梢で何時でも梟が鳴いてゐる。さう  
して、冷飯草履の音がびちやびちやする。それが拜殿の前  
で已むと、母は先づ鈴を鳴らして置いて、すぐに蹲しゃがんで拍  
手を打つ。大抵は、この時、梟が急に鳴かなくなる。それから、  
母は一心不亂に夫の無事を祈る。母の考では、夫が侍であ  
るから、弓矢の神の八幡宮へ、かうやつて是非ない願を掛  
けたら、よもや聽かれぬ道理はなからうと、一途に思ひ詰

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

めてゐる。子供はよくこの鈴の音で眼を覺して、四邊を見  
ると眞暗なものだから、急に背中で泣きだす事がある。そ  
の時、母は口の内で何か祈りながら、背を振つてあやさう  
とする。すると、旨く泣きやむ事もある。又益、烈しく泣きた  
てる事もある。いづれにしても、母は容易に立たない。  
一通り夫の身の上を祈つて了ふと、今度は細帶を解い  
て、背中の子をずり卸すやうに背中から前へ廻して、兩手  
に抱きながら、拜殿を上つて行つて、好い子だから、少しの  
間、待つてお出でよ。ときつと自分の頬を子供の頬へ擦り  
つける。さうして、細帶を長くして、子供を縛つて置いて、そ  
の片端を拜殿の欄干に括り著ける。それから、段段を下り

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



夏目漱石 英文學者・小説家。本名は金之助。東京の人。東京帝國大學文學部出身。同大學第一高等學校の講師。後、東京朝日新聞社に入つた。大正五年歿、年五十。

て来て、二十間の敷石を、往つたり來たり、御百度を踏む。拜殿に括り著けられた子は、暗闇の中で、細帶の丈の許す限り、廣縁の上を這廻つてゐる。さういふ時は、母に取つて甚だ樂な夜である。けれども、縛つた子にひいひい泣かれると、母は氣が氣でない。御百度の足が非常に早くなる。大變息が切れる。仕方のない時は、途中で拜殿へ上つて來て、色色すかして置いて、又御百度を踏みなほす事もある。かういふ風に、幾晩となく、母が氣を揉んで、夜の目も寢ずに心配してゐた父は、とくの昔に浪士の爲に殺されてゐたのである。

こんな悲しい話を、夢の中で母から聞いた。(夏目漱石)

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

\*阿蘇山中に源を發し、熊本市の東南部を流れて島原灣に注ぐ川。

### 一〇 橋の上



小 泉 八 雲

私の老車夫平七が、熊本近傍の或名高い寺へ、私を乗せて行く路すがらであつた。白川にかかつてゐる駱駝の背のやうに曲つたものさびた橋へ來た。そこで、私は暫く其處の風景を樂しむために、橋の上で停まることを平七に命じた。夏の空の下で、雷光のやうに白い、溢れるやうな日光に浸された土の色は、殆ど幻のやうに綺麗に見えた。橋の下には、淺い川が、色色の緑の蔭になつ

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



た灰色の石の河底を、からからざわざわ、音を立てて流れた。前方には、赤白い道が、肥後の大平野を取巻いてゐる高い青い山脈の方へ、森を通つたり、村を通つたりして、うねつてゐるのが、交々見えたり消えたりしてゐた。うしろには、澤山の屋根が遙かに青く入交つてゐる熊本があつた。ただ遙かの森の山の緑に對して、城の綺麗な白い輪郭がはつきり現れてゐた。……中で見てゐると、熊本は汚ない處だが、その夏の日に私が見たやうに見ると、霞と夢とで出來た幻の都である。

額を拭きながら平七は言つた。二十二年前、いや二十三年前、私は此處に立つて、町の燃えるのを見ました。」

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

「夜ですか。私は尋ねた。」

「いいえ。老人は言つた。午後でした。雨の日でした。……戦争中で、町は燃えて居りました。」

「誰が戦争をしてゐたのです。」

「城の兵隊が薩摩の人達と戦争をしてゐました。私共は弾を避けるために、地面に穴を掘つて、その中にゐました。薩摩の人達は山の上に大砲を据ゑました。それから城内の兵隊がそれを撃つたので、弾は私共の頭の上を通つて行きました。町は皆焼けました。」

「ところで、君はどうして此處へ來合せたのか。」

「私は逃げて來たのです。私は獨りでこの橋まで走つて

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



來ました。ここから三里程ある私の兄の農場へ行けると  
思つたのです。ところが、此處で止められました。

「誰が止めたのです。」

「薩摩の人達です。——誰だか分りません。橋へ参ります  
と、三人の農夫がゐました。——私は農夫だと思つたので  
す。——それが欄干に凭りかかつてゐました。大きな笠と  
蓑とをつけて、草鞋を穿いてゐました。私は丁寧に言葉を  
かけました。すると、一人は頭をぐるりと廻して、私に「ここ  
に止つてゐろ。」と申しました。それだけでした。外の人は何  
も申しません。それから私はその人達は農夫でない事が  
分つて、恐しくなりました。」

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

「どうして農夫でない事が分つたのです。」

「蓑の下に長い刀を——大層長い刀を隠してゐました。  
大層背の高い人達でした。橋に凭りかかつて、川を見下し  
てゐました。私も側に立つてゐました。丁度その左の方  
の三番目の柱の脇で、その人達と同じ事をしてゐました。  
誰も物を言ひません。そして長い間欄干に凭りかかつて  
立つてゐました。」

「どれ程。」

「はつきり分りませんが、——長かつたに相違ありませ  
ん。私は町が燃えてゐるのを見ました。その間、私に物を言  
ふ者も、亦私を見る者もありませんでした。皆水を見詰め

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



てみました。すると、速足で騎兵の將校が來ました。ずつとあたりを見ながら……。」

「町から。」

「はい、そのうしろの道をずつと……その三人の人達は笠の下から見てみました。が、頭は動かしませんでした。川を見下してゐる振をしてみました。ところが、馬が橋にかかると、その時、三人が振向いて躍りかかりました。そして一人は馬の轡を掴む、一人はその將校の腕を押へる、一人はその首を斬落す、ほんのちよつとの間に……。」

「その將校の首を。」

「はい、聲を出す間もないうちに首は落ちました……。」

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

んな早業を見た事はありません。三人とも一言も發しませんでした。」

「それから。」

「それから、その死骸を欄干の上から川へはふり込みました。そして一人が馬をなぐりました、ひどく。そこで馬は駈出しました……。」

「町の方へ。」

「いいえ、馬は橋向うの村の方へ、ずつと追ひやられました。首は川へ投棄しないで、一人の薩摩の人はこれを蓑の下へ入れて持つてみました……それから、皆、前の通り欄干に凭りかかつて見下してみました。私の膝は顫へまし

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



た。三人の武士は一言も物を言ひませんでした。私にはその息も聞えませんでした。私はその人達の顔を見るのも恐しく思ひました。——私は川を見續けてみました。……少したつて又馬の蹄の音が聞えました。そして私の胸が騒いで、氣持が悪くなりました。見上げると、大層速く又一人の騎兵が往來をずつとやつて來ました。それが橋にかかるまで、誰も動きません。すると、忽ち首が落ちました。死骸は川にはふり込まれ、馬は追ひやられました。事は、全く前の通りでした。そんな風にして、三人殺されました。それから武士は橋を立去りました。

「君も一緒に行きまされたか。」

「いいえ、その人達は、三人目を殺すと、直ぐに出かけました。——首を携へて。私には目もくれませんでした。私はその人達がずつと遠くなるまで、動く事も出来ないで、橋の上に立ちすくんでみました。それから私は燃えてゐる町へ走つて歸りました。私は一所懸命に走りました。そこで薩摩の軍勢が退却中だといふ事を聞きました。直ぐあとで東京から軍隊が参りました。それで私も何うやら仕事を手につきました。私は兵隊のために草鞋を運びました。」

「橋の上で殺されたのを君が見たといふ、その人達は誰でしたか。」

「存じません。」



「君は尋ねて見ようとした事はないのかね。」  
「ありません。再び額を拭きながら、平七は言つた。戦争が  
すんで餘程になるまで、私はその事をちつとも口にしま  
せんでした。」

「そりや何うして、私は追究した。」

平七は驚いた顔をして、分らない氣の毒な人だといふ  
風に、につこりして答へた。と申しますのは、さうするの  
間違つてゐたでせう。——恩知らずのやうな事になりま  
したでせうからね。」

私は當然叱られたやうな氣がした。

(田部隆次譯「小泉八雲全集」による)

田部隆次 英文  
學者。現に女子  
學習院教授。

小泉八雲 英文  
學者。もと英國  
人。本名はラフ  
カチオ・ヘルン。  
明治二十三年頃  
歸化した。熊本  
高等中學校・東  
京帝國大學・早  
稲田大學などに  
教授した。明治  
三十七年歿、年  
五十五。

(一) 慶長五年(一六〇〇)六  
月徳川家康は上杉  
景勝を討伐した。  
(二) 寛永十三年(一六三六)  
歿、年七十二。  
(三) 福島縣西白河郡に  
屬する地名。  
(四) 同縣刈田郡に屬す  
る地名。  
(五) 同縣に屬する地名  
で、今では郡名と  
なり、石城と書く。  
(六) 同縣に屬する地名  
で、今では郡名と  
なつてゐる。  
(七) 桓武天皇から出た  
平氏の一支族で、  
この邊一帶を所領  
としてゐた豪族。

### 一一 伊達政宗の膽氣

會津征伐の時、伊達左京大夫政宗は、急ぎ本國に歸り、搦  
手より攻入るべき由仰を承り、大阪を打立ち、夜を日に繼  
ぎて馳下る。白河より白石まで、皆敵の中なれば、道塞がり  
ぬ。常陸の國を廻りて、磐城相馬に差懸つて、國に歸らむと  
するに、相馬また累代の仇なり。然るに、政宗僅に五十騎ば  
かり引具して、常州を經、磐城と相馬との境に到り、先づ相  
馬が許に使を立て、この度、徳川殿上杉を征伐し給ふによ  
り、政宗搦手より向ふべき由の仰を承りぬ。路既に塞がり  
候ひし程に、漸うこの地に馳著きぬ。あまりに早めて路を



上杉景勝や石田三成などと姻戚關係があつて、徳川氏に容易に従はなかつた。寛永十一年歿、年八十八。

打ちし故、疲れ候。願はくは城下に旅館を賜はらばや。馬の脚休めて、明日國に歸り入らむと存ず。と言はせたり。  
相馬長門守義胤これを聞き、あつばれ、運の盡きたる事ぞかし。さらぬだに、伊達は相馬が年來の敵なり。ましてや、味方討たむ一方の大將承りたるといふ者を、いのでい、今宵一夜討して、案内知らぬ奴原を、一人も残らず討取つて、年來の仇に報い、又今度の賞にも預からばや。とて、やがて民家をしつらひて迎へ入れ、人人集めて夜討の評定したりけり。

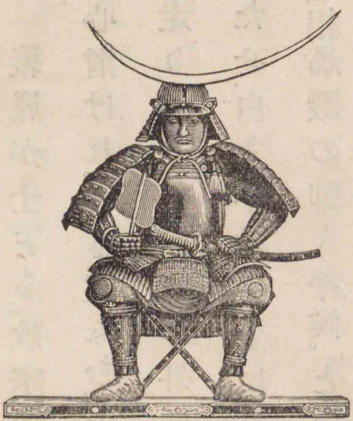
爰に水谷三郎兵衛といふ者、遙かの末座に候ひけるが、進み出で、末座の異見恐れ入つて候へども、既に僉議の座

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

窮鳥懐ニ入レバ、仁人ニ憫レマル。(頼氏家訓)

相馬郡に屬する地名。

今の午後二時。



伊達政宗

に連なりて候へば、所存を残すべきにあらず。抑、窮鳥懐に入る時は、獵者もこれを殺さずとこそ申し候へ。政宗ほどの大將、年來の恨を捨てて、君を頼みて來りしを、たばかりて闇闇と討たれむこと、勇者の本意にあらず。長き弓箭の瑕瑾ならずや。又彼が國境駒が峯に至らむに、行程僅に二里。今日の日未だ未の時に下らず。政宗が國に入らむとだに思はば、日夕べならざるに至るべし。それに、僅の勢にて駐まること、深き慮なからざらむや。只この度はよきに警固して國に返し、重ねて戰に臨まむ日、勝

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



敗を天運に任せらるべきにや」と申しければ、一座の人人この議に同じ、兵糧秣藁鹽魚に至るまで積置き、篝を焼き、夜廻りす。

義胤が士ども、政宗のあまりに静まり返りたる體こそ心憎けれ。いざ試みむ」とて、夜更けて後、馬二匹取放ち、人人走り散りて、以ての外に騒ぎ罵る。政宗、小童一人に燈火持たせ、白き小袖を上に打掛け、左の手に刀を提げて立出で、「相馬殿の御人や候」といふ。これに候」とて行向へば、物音高く候。政宗が下人ばら狼藉候はむには、よく鎮めて賜はり候へ」とて、また内にぞ入りたりける。

今の午前十時

夜明くれども立ちもやらず、巳の時ばかりになりて、義

胤の許に使用して一禮し、さて鎮めて馬を打つて行く。ひそかに人を附けて窺伺はしむるに、かの國の境駒が峯の彼方に、伊達家の軍兵雲霞の如く充ちて出迎へぬ。

かくて、關が原の事終りて、相馬既に上杉に心合せたれば、亡ぶべきに極まる。政宗訴へ申されしは、相馬は年來政宗が敵なり。石田・上杉に與よしたるが一定ならむには、政宗彼がために討たるべし。然るに、君の仰承りて馳下る由を聞きて、深き恨を忘れ、新恩を施しき。彼が逆謀にあらざるの證に候はずや。又、累代の弓箭の家、永く斷えむこと不便ふべんの至なり」と、度々歎き申されしかば、後には本領を相馬に賜はりけりとぞ聞えし。  
(湯淺常山著「常山紀談」)

同じく慶長五年九月に關が原の戦があつたが、上杉・相馬は石田三成の方に加増してゐた。

湯淺常山 江戸時代の儒者。岡山藩士。天明元年(一八一四)歿、年七十四。



### 一二 競争と科學

この頃は世界の平和といふことが頻りに唱へられる。世界大戦の慘害を目のあたりに見た者が、戦争の絶無な平和の世界を希望し、これに憧憬するのは、決して無理ではない。併し、今日までの歴史に鑑み、又現在の状態を觀察すれば、絶對的平和の時代が人類生活に來ようとは思はれない。生活は戦争なり。」と昔の人の説いた通り、凡そ生きて居る以上は、何等かの形に於ける戦は避けられない。さうして、多くの異なつた民族と民族とが對立して、各自の發展に努めてゐるからは、その間に利害の衝突あるを免

\*Life is war.  
第十七世紀の英國の哲學者ホッブスの言。

れ得ないのも明白である。

甲の膨脹が乙の存在を危地に陥れるとか、丙の發展が丁の進路を塞ぐとかいふ場合には、到底そのままでは濟まず、談判に談判を重ねても遂に纏まらなければ、何と言つても戦争の外に方法はなくなる。されば、何れの民族でも、一方には熱心に平和を唱道し、力を盡して戦争を避ける手段を講じながら、他の一方に於ては萬一の場合を慮つて、軍備を充實することを決して怠らない。假令戦ふには至らないまでも、他の民族からの無理な要求を拒絶するには、常に相當の軍備のあることが必要であることは當然である。



今の世の中で戦争を始めるとは、非常な決心を要するから、容易な事では砲火を交へるまでには至らないだらうが、その間にも、民族の競争は決して休んでは居ない。平和の時代には、又所謂平和の戦争が盛んであつて、これに敗れた民族は、實に悲惨な状態に陥らなければならぬ。平和の戦争とは、即ち世界の市場を相手とする殖産工業の競争であつて、この競争に於ては、優良品を安く賣出す者が勝利を占めるのは無論である。交通の開けなかつた昔の時代には、各民族は自分の入用な物を自分で造つて、他とは交渉なしに生活することが出来たが、文明が進み、運輸が便利になつて、世界の隅隅までが隣同士の如くに

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

なつた今日に於ては、鎖國は到底不可能である。他民族と貿易する以上は、否でも應でも平和の戦争に加はらなければならぬ。かくして、實戦の有無に拘はらず、民族間に競争の絶える事はないが、この競争に勝つか負けるかは、主として科學の進歩如何によつて決するのである。最近の世界大戰の如きは、既に殆ど科學の戦争とも言ふべきであつたが、今後の戦争では、更に科學の應用が盛んになつて、その勝敗は科學應用の最後の僅少な優劣によつて決することであらうと思はれる。終局の勝敗が種種複雑な理由によつて決するのは無論で、一概には論斷せられないが、他の事情が大體同様である場合には、一歩

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



でも先へ科學の進歩して居る方が必ず勝つべきことは疑がない。飛行機でも、潜水艦でも、毒瓦斯でも、爆弾でも、敵に優つたものがあれば、無論それだけ勝てる見込が多い。しかも、優良な武器を造ることは、決して一朝一夕に出来る譯ではなく、常常から十分に研究を積まなければならず、そのためには、基礎となるべき科學の進歩が何よりも必要である。科學研究に遅れた民族は、何時でも他の新發明や新發明を僅に眞似するに過ぎないから、何時までも他より先に進むことが出来ず、永久に他の後に随つて行く外はないが、これでは、一朝事あるに臨んで、頗る心細い次第である。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

假に最新式の機械を外國から輸入したとしても、これが破損した場合には、これと同等か又は同等以上のものを製造し得るだけの腕前がなければ、完全な修理は出来ない。又最新の科學的知識を應用した機械は、當然精巧を極めたものであるから、これを操縦するには、それに準じた高い程度の科學的素養と科學的腦力とを要する。若し、もこの點に缺けた者が操縦すれば、飛行機ならば墜落し、潜水艦ならば沈没するのが當然である。されば、今後萬一の場合を思へば、専門科學者の研究が極めて大切であることは勿論であるが、同時に、一般世人の科學的素養の水準を高めることが何より急務である。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



武器を用ひる戦争は如何に激しくても一時的であるが、所謂平和の戦争は長く續いて、而も休む時がない。野蠻時代には、交通の便が開けなかつたため、各民族は自國で出來た衣服を著て濟ませてゐたが、文明が進み、國際間の關係が密接になるに隨つて、嗜好も次第に變り、新な要求も生じて、他國の産物を輸入せずには一日も暮されないやうになつた。例へば、茶の出來ない國でも、茶が日常缺くべからざる飲料となり、羊の飼へない國でも、誰も彼もが毛絲製の物を著るやうになつてゐるが、輸入を要するのは必ずしも斯様な簡単な物ばかりではない。文明が進めば人間の生活が複雑になつて、日日に入用な品物も、多く

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

(-)Sewing-machine. (-)Type-writer.

裁縫機械 印字機

は精巧な細工を施した人造品である。用談には電話機を用ひ、外出には自動車に乗り、手紙はタイプライターで書き、著物はミシンで縫ふといふやうに、何をするにも機械が入用であるが、此等の機械を製造し得ない民族は、悉く此等を他から輸入しなければならぬ。單に娛樂のためにも、ピアノ、蓄音機、活動寫眞機、ラヂオなどを要する。

\* \* \* \* \*

かくの如く、文明人の生活には、機械は附屬物であり、必需品であるから、誰もこれを使はずに濟ます譯には行かない。文明の進むにつれ、その需要は益々殖える一方である。しかも、精巧な機械を造るには、考案者のみならず、實際に

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



手を下してこれを製造する職工までが、科學的知識を備へて居なければならぬ。若しも職工の頭が低級であれば、形だけは巧妙に眞似ても、用ひて見ると、全く役に立たないやうな、似て非なる物を造るであらう。されば、世間一般の科學的素養の低い國では、天産物をそのまま安く輸出して、加工品を外國から高く輸入しなければならず、それでは經濟が成立たない。特に面積が狭く天産物に乏しい國では、斯様な状態が長く續いては、やがて破産する外はないのである。輸出と輸入との平均を保つて行くには、是非とも他國に劣らない立派な品物を製造して、世界の市場に持出さなければならぬが、それには、一人一人

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

の職工までが相當に優れた科學的知識を持つまでに、一般の水準を高める必要がある。

科學の進んだ民族は、製造の方法を巧みに工夫して、優良品を安く賣出し得る。これに反して、科學の幼稚な民族は、腕が足りない上に、製造に無駄な手間が多いので、拙劣な品を高く賣らなければ引合はないので、同時に市場に現れた場合に、何れが競争に勝つかは、態ここに論ずるまでもない。

以上、吾人は、物質方面に於ける科學の必要に就て、些かその所感を述べたのであるが、併し決して科學の效用はこの方面に限る譯ではない。科學的に考へ得る頭腦を有

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1  
 することは、思想方面にも頗る有効であつて、他の民族に  
 負けないためには、この方面を特に大いに奨励しなければ  
 ならない。武器やその他の製造工業の方に直接應用さ  
 れるのは、主として物理学と化学とであるから、動もする  
 とこれのみが必要なもの如くに考へられ易いが、如何  
 に巧妙に出来た人造品でも、無論天産物に加工したもの  
 は、動物植物礦物などの學問をも等閑視してはならない。  
 併し、此等は思想の上には餘り直接な影響は及ぼさない。  
 思想の上に殊に大關係を有するのは生物学である。  
 今日11の社會制度は昔からの引續12で、隨分不合理と考へ

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1  
 られる部分もあり、強ひて維持しようとなつて、却て破  
 滅を早める心配がないとも限らないから、時期を見計ら  
 つて徐13に改めて行かなければならない點が少なくない。  
 生物學的知識が國民一般に行渡つて、思想の根柢を作る  
 やうになれば、頑冥な舊思想に何處までも従ふことは不  
 可能となり、不合理な制度も段段に改良されるに至るで  
 あらう。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1  
 右に述べた通り、物質的にも精神的にも、民族發展のた  
 めには、科學の進歩が何よりも大切であるが、この事は如  
 何なる民族でも同じ程度になされ得べきや否やと尋ね



ると、これは無造作に、然りと答へられない。猿には、如何に骨折つて仕込んでも、猿だけの藝しか出来ないが如く、各民族にはそれぞれ科學的能力の限度に差異があつて、盛んに自ら科學の進歩する民族もあれば、幾ら獎勵しても或程度以上には到底進み得ないものもあらう。例へば、黒人が俄に進歩して、科學の研究に於て白人を凌ぐやうにならうとは到底考へられない。自己の屬する民族の將來を思へば、科學は何處までも獎勵して、その進歩を圖らなければならず、又研究すれば研究しただけの効果は必ず擧るに相違ないけれども、その民族としての天分以上のことは遂に出来まい。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

丘淺次郎 生物學者。理學博士。東京帝國大學理學部出身。長らく東京高等師範學校教授であつた。現に同校名譽教授・東京文理科大學講師・帝國學士院會員。

科學が進まなければ、他の民族に負けることは明白であるから、假初にも發展・繁榮を望む民族は、科學は能ふかぎり進めなければならぬ。けれども、或民族は全力を盡しても、この點で他の民族に到底肩を比べ得ないといふこともあらう。斯様な場合には、民族そのものを改良するといふことも亦考ふべきであらう。

ともあれ、人の世に競争の存續する限り、苟もその競争場裏に立つものは、人事を盡して天命を待つ外はないのであつて、吾人は茲に科學研究の一日も忽諸に付すべからざることを痛感するのである。

(丘淺次郎著「猿の群から共和國まで」による)

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



一三 高瀬舟

高瀬舟は京都の高瀬川を上下する小舟である。徳川時代、京都の罪人が遠島を申し渡されると、本人の親類が牢屋敷へ呼出されて、其處で暇乞をする事を許された。それから、罪人は高瀬舟に載せられて、大阪へ廻されることであつた。それを護送するのは、京都町奉行の配下にある同心で、この同心は、罪人の親類の中で主立つた一人を、大阪まで同船させる事を許す慣例であつた。これは上へ通つた事ではないが、所謂大目に見るのであつた。黙許であつた。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

當時遠島を申し渡された罪人は、勿論重い科を犯したものと認められた人ではあるが、決して、盗をするために人を殺し火を放つたと云ふやうな、獍惡な人物が多數を占めてゐた譯ではない。高瀬舟に乗る罪人の過半は、所謂心得違のために、想はぬ科を犯した人であつた。

さういふ罪人を載せて、入相の鐘の鳴る頃に漕出された高瀬舟は、黒ずんだ京都の町の家家を兩岸に見つつ、東へ走つて、賀茂川を横ぎつて下るのであつた。この舟の中で、罪人とその親類の者とは、夜どほし身の上を語り合ふ。何時も何時も、悔んでも還らぬ繰言である。護送の役をする同心は、傍でそれを聞いて、罪人を出した親戚眷族の悲

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



慘な境遇を細かに知る事が出来た。所詮、町奉行の白洲で表向の口供を聞いたり、役所の机の上で口書を讀んだりする役人の、夢にも窺ふ事の出来ぬ境遇である。

同心を勤める人にも色色の性質があるから、この時ただ五月蠅いと思つて、耳を掩ひたく思ふ冷淡な同心があるかと思へば、又しみじみと人の哀を身に引受けて、役柄ゆゑ氣色には見せぬながら、無言の中に私かに胸を痛める同心もあつた。場合によつて、非常に悲惨な境遇に陥つた罪人とその親類とを、特に心弱い、涙脆い同心が宰領して行く事になると、その同心は不覺の涙を禁じ得ぬのであつた。そこで、高瀬舟の護送は、町奉行所の同心仲間、不

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

快な職務として嫌はれてゐた。

何時の頃であつたか。多分、江戸で白河樂翁公が政柄を執つてゐた寛政の頃でもあつただらう。知恩院の櫻が入相の鐘に散る夕べに、これまで類のない、珍しい罪人が高瀬舟に載せられた。それは名を喜助と云つて、三十歳ばかりになる、住處不定の男である。固より牢屋敷に呼出されるやうな親類はないので、舟にも只一人で乗つた。護送を命ぜられて、一緒に舟に乗込んだ同心羽田庄兵衛は、ただ喜助が弟殺しの罪人だと云ふことだけを聞いてゐた。さて、牢屋敷から棧橋まで連れて来る間、この瘦肉の色

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

(一) 磐城國(今の福島縣)白河の城主松平定信。  
(二) 光格天皇の御代の年號。(一四九一—一四九六)  
(三) 當時の將軍は十一代家齊で、松平定信は老中として重んぜられてゐた。  
(四) 京都東山にある淨土宗の本山。



の蒼白い喜助の様子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬つて、何事につけても逆らはぬやうにしてゐる。しかも、それが、罪人の間に往往見受けるやうな、温順を装つて權勢に媚びる態度ではない。庄兵衛は不思議に思つた。そして、舟に乗つてからも、單に役目の表で見張つてゐるばかりでなく、絶えず喜助の舉動に細かい注意をしてゐた。

その日は暮方から風が歇んで、空一面を蔽つた薄い雲が、月の輪郭をかすませ、漸う近寄つて來る夏の温かさが、兩岸の土からも、川床の土からも、靄になつて立昇るかと思はれる夜であつた。下京の町を離れて、賀茂川を横ぎつ

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

た頃からは、四邊がひつそりとして、ただ舳（さき）に割（き）かれる水のささやきを聞くのみである。

夜舟で寝る事は罪人にも許されてゐるのに、喜助は横にならうともせず、雲の濃淡に従つて、光の増したり減じたりする月を仰いで、黙つてゐる。その額は暗やかで、目は微かな輝きがある。庄兵衛はまともには見てゐぬが、始終喜助の顔から目を離さずにある。そして、不思議だ、不思議だと、心の裏で繰返してゐる。それは、喜助の顔が、縦（たて）から見ても横（よこ）から見ても、如何にも楽しさうで、若し役人に對する氣兼ねがなかつたなら、口笛を吹き始めるとか、鼻歌を歌ひ出すとかしさうに思はれたからである。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



庄兵衛は心の裏に思つた。これまでこの高瀬舟の宰領をした事は幾度だか知れない。併し、載せて行く罪人は、何時も殆ど同じやうに、目も當てられぬ氣の毒な様子をしてゐた。それに、この男は何うしたのだらう。遊山舟にでも乗つたやうな顔をしてゐる。罪は弟を殺したのださうだが、よしやその弟が悪い奴で、それはどんな行きがかりになつて殺したにせよ、人の情として好い心持はせぬ筈である。この色の蒼い瘦男が、その人の情と云ふものが全く缺けてゐる程の、世にも稀な悪人であらうか。どうもさうは思はれない。ひよつと氣でも狂つてゐるのではあるまいか。いやいや、それにしては、何一つ辻褃の合はぬ言葉や

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

舉動がない。この男はどうしたのだらう。庄兵衛がためには、喜助の態度が、考へれば考へるほど解らなくなるのである。

暫くして庄兵衛は、怵へ切れなくなつて呼びかけた。

「喜助。お前何を思つてゐるのか。」

「はい。」と云つて四邊を見廻した喜助は、何事をか役人に見咎められたのではないかと氣遣ふらしく、居ずまひを直して庄兵衛の氣色を伺つた。

庄兵衛は自分が突然問を發した動機を明かして、役目を離れた應對を求め、分疏をしなくてはならぬやうに

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



感じた。そこで、かう云つた。いや、別に譯があつて聞いたのではない。實はな、己は先刻から、お前の島へ行く心持が聞いて見たかつたのだ。己はこれまで此の舟で大勢の人を島へ送つた。それは随分色色な身の上の人だつたが、どれもどれも島へ行くのを悲しがつて、見送りに來て一緒に舟に乗る親類の者と、夜どほし泣くにきまつてゐた。それに、お前の様子を見れば、どうも島へ行くのを苦にしてはゐないやうだ。一體お前はどう思つてゐるのだい。」

喜助はにつこり笑つた。御深切に仰しやつて下すつて有り難うございます。なる程、島へ行くといふことは、外の人には悲しい事でございませう。その心持は私にも思ひ

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

遣つて見る事が出來ます。併し、それは世間で樂をしてゐた人だからでございます。京都は結構な土地ではございますが、その結構な土地で、これまで私の致して參つたやうな苦しみは、何處へ參つてもなからうと存じます。お上のお慈悲で、命を助けて島へ遣つて下さいます。島はよしや辛い處でも、鬼の栖む處ではございませう。私はこれまで、何處と云つて、自分のゐて好い處と云ふものがございませう。今度お上で島にゐると仰しやつて下さいます。そのゐると仰しやる處に、落著いてゐる事が出來ます。先づ何よりも有り難い事でございます。それに、私はこんなにかよわい體からだではございますが、ついぞ病

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



氣を致した事はございませんから、島へ往つてから、どんな辛い仕事をしたつて、體を痛めるやうな事はあるまいと存じます。それから、今度島へお遣り下さるに就きました。二百文の鳥目を戴きました。それをここに持つて居ります。かう云ひかけて、喜助は胸に手を當てた。遠島を仰せ付けられる者には、鳥目二百文を遣はすといふのは、當時の掟であつた。

喜助は言葉を繼いだ。お恥しい事を申し上げなくてはなりません。私が今日まで二百文といふお足を、かうして懐に入れて持つてゐた事はございませぬ。何處かで仕事に取付きたいと思つて、仕事を尋ねて歩きまして、それ

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11

が見つかり次第骨を惜しまずに働きました。そして、貰つた錢は、何時も右から左へ人手に渡さなくてはなりません。なんだ。それも、現金で物が買つて食べられる時は私の工面の好い時で、大抵は借りた物を返して、又後を借りたのでございませぬ。それがお牢にはひつてからは、仕事をせずにお牢に食べさせて戴きます。私はそればかりでも、お上に對して濟まない事を致してゐるやうでなりません。それに、お牢を出る時に、この二百文を戴きましたのでございませぬ。かうして相變らずお上の物を食べてゐて見ますれば、この二百文は私が使はずに持つてゐる事が出来ませぬ。お足を自分の物にして持つてゐると云ふ事は、私に取つては、

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11



これが初でございませう。島へ往つて見ますまでは、どんな  
仕事が出来るか分りませぬが、私はこの二百文を、島です  
る仕事の本手にしようと思つて居ります。かう云つて、  
喜助は口を噤つんだ。

庄兵衛は「うん、さうかい。」とは云つたが、聞く事毎に餘り  
意表に出たので、これも暫く何も云ふことが出来ずに、考  
へ込んで黙つてゐた。

風げ

庄兵衛は彼かれ此こ初老こに手の届く年になつてゐて、もう子  
供が四人ある。それに老母が生きてゐるので、家は七人暮  
しである。平生人には吝こ嗇そと云はれる程の儉約な生活を  
してゐて、衣類は、自分が役目の爲に著る物の外、寢巻しか

\*四十歳の異稱。

拵へぬ位にしてゐる。併し、不幸な事には、妻を好い身代の  
商人の家から迎へた。そこで、女房は夫の貰ふ扶持米で暮  
しを立てて行かうとする善意はあるが、裕ゆかな家に可愛  
がられて育つた癖があるので、夫が満足する程、手元を引  
締めて暮して行く事が出来ない。動もすれば、月末になつ  
て勘定かんが足りなくなる。すると、女房が内證で里から金を  
持つて来て、帳尻を合せる。それは夫が借財かと云ふものを  
毛蟲のやうに嫌ふからである。さう云ふ事は、所詮夫に知  
れずにはゐない。庄兵衛は、五節句だと云つては里方から  
物を貰ひ、子供の七五三の祝だと云つては里方から子供  
に衣類を貰ふのでさへ、心苦しく思つてゐるのだから、暮



しの穴を填めて貰つたのに氣が付いては、好い顔はしない。格別平和を破るやうな事のない羽田の家に、折折風波の起るのは、これが原因である。

庄兵衛は、今喜助の話聞いて、喜助の身の上をわが身の上に引比べて見た。喜助は仕事をして給料を取つても、右から左へ人手に渡して亡くして了ふと云つた。如何にも哀な氣の毒な境界である。併し、一轉してわが身の上を顧みれば、彼と我との間に、果してどれ程の差があるか。自分も上から貰ふ扶持米を、右から左へ人手に渡して暮してゐるに過ぎぬではないか。彼と我との相違は、謂はば十露盤の桁が違つてゐるだけで、喜助の有り難がる二百文

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

に相當する貯蓄だに、此方には無いのである。

さて、桁を違へて考へて見れば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでゐるのに無理はない。その心持は此方から察して遣る事が出来る。併し、如何に桁を違へて考へて見ても、不思議なのは、喜助の慾のない事、足る事を知つてゐる事である。

喜助は世間で仕事を見付けるのに苦しんだ。それを見付けさへすれば、骨を惜しまずに働いて、漸う口を糊する事の出来るだけで満足した。そこで、牢にはひつてからは、今まで得難かつた食物が、殆ど天から授けられるやうに、働かずに得られるのに驚いて、生れてから知らぬ満足を

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



覺えたのである。

庄兵衛は如何に柀を違へて考へて見ても、ここに彼と我との間に大いなる懸隔のある事を知つた。自分の扶持米で立てて行く暮しは、折折足らぬ事があるにしても、大抵出納が合つてゐる。手一杯の生活である。然るに、そこに満足を覺えた事は殆ど無い。常は幸とも不幸とも感ぜずに過してゐる。併し、心の奥には、かうして暮してゐて、ふいとお役御免になつたら何うしよう、大病にでもなつたら何うしよう、と云ふ疑懼が潜んでゐて、折折妻が里方から金を取出して來て、穴填めをした事などが分ると、この疑懼が意識の鬨しやうの上に頭を擡たげて來るのである。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

一體この懸隔は何うして生じて來るだらう。只上邊だけを見て、それは喜助には身に係か累れがないのに、此方にはあるからだ、と云つて了へば、それまでである。併し、それは嘘である。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のやうな心持にはなれさうにない。この根柢はもつと深い處にあるやうだ、と庄兵衛は思つた。

庄兵衛は只漠然と、人の一生といふやうな事を思つて見た。人は身に病があると、この病がなかつたらと思ふ。その日その日の食がないと、食つて行かれたらと思ふ。萬一の時に備へる蓄がないと、少しでも蓄があつたらと思ふ。蓄があつても、又その蓄がもつと多かつたらと思ふ。かく

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



森鷗外 醫學博士。文學博士。名は林太郎。鳥根縣の人。東京帝國大學醫學部出身。陸軍軍醫に職を奉じ、軍醫總監となる。後、東京帝國博物館長兼圖書頭・帝國美術院長・臨時國語調査會長などに任ぜられた。大正十一年歿、年六十三。

の如くに先から先へと考へて見れば、人は何處まで往つて踏止まる事が出来るものやら分らない。それを、今日の前で踏止まつて見せてくれるのがこの喜助だ、と庄兵衛は氣が付いた。

庄兵衛は今更のやうに驚異の目を見張つて、喜助を見た。この時、庄兵衛は、空を仰いでゐる喜助の頭から、後光がさすやうに思つた。(森鷗外著「鷗外全集」による)

【附記】この話は、寛政七年に年八十六で歿した、嘗て京都の町奉行の與力を勤めたことのある、神澤杜口といふ人の著した「翁草」に見える所に據つて書いたものだ。但し原作には、ここに採録したものの約半分程の分量が、更に續けてある。(補修者)

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

旅裝束

せをきく。けがうけし。

一四 篤實

篤行 誠實

備後の國を通りし時、百姓と見えし。年老いし男二人と、ふと道連になり、山の名、里の風俗など尋ね問ひて行き、かりしに、わが野服を著し、方頂巾を戴きしを怪しみて、「如何なる人にて、いづくよりいづくへ行き給ふにや。」と問ふに、「都方の醫者なるが、醫術修行のために諸國を遊歴するなり。」と答へし。かば、さても頼もしき御人や、我等が住む里は、向うの山の奥なるが、親しき家の女房に、奇妙の難病ありて、はや二年になり、近きあたりに住み候へば、聞くもいぶせく、その家にも、いろいろと醫療つくさざる事もなけれ。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



31  
 4  
 5  
 6  
 7  
 8  
 9  
 今の尾道市。  
 大分県中津市  
 外中津市  
 尾道市  
 尾道市

ど、露ばかりのしるしもなく、今ははや命だに危く見え候。かく山深き片田舎にて、名高き醫師も候はず。あはれ都近くもあるならばなど、親類の者は歎き居り候。今日は、圖らずも、京都の御醫と承り候へば、親類どもが常常の言葉も思ひ出し候ひて、あはれにも候へば、何とど脈ばかりにても取らせ給ひて、彼等が心をも慰め給はらばや」と、誠の心言葉に出でて、又餘儀もなく見えたりしかば、余も、この道修行の事なれば、いと易き事なり。とうけがひて、かの者どものしりへに従ひて、尾道の二三里ばかり此方より、右の方に分入る。

鹿狼の通ふ如き細道を、谷に降り、峯に登りて、行けども

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

3  
 廣島縣御調郡美ノ郷村字本郷。

行けども程遠きに、日影もやや傾き、腹饑ゑ、足疲るれば、僕腹立ちて、程も知れぬいたづら事。とつぶやく。とかうなだめて行く程に、やうやうに到り著きぬ。とある山あひの、いと寂しき人里なり。本郷といふ處なりと。

その家に入れば、病者は五十ばかりなる女にて、その夫を六兵衛と云ふ。案内の者しかじかの由をいへば、家内皆驚き悦び、去年の冬より、難治の病に罹り候ひしが、次第に重りて、果は腹裂くる心地して、苦しみ譬へむ方なし。日日月に病募り、春の頃よりは一入にて、横に臥すれば下腹一入裂くるが如く、立てば苦しく、坐すれば堪へ難し。それゆゑ、晝夜ただ炬燵の櫓に両手をつかへ、立ちながら俯向

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



きて居る時のみ、少し心安らかなるやうなれば、春以來は、  
 片時も坐せず、臥さず。ただ晝夜、食事にも、眠るにも、この通  
 なり。その苦しみなかなか云ふも愚かなり。近き頃は殊に  
 悪しければ、命の限も遠からじと、一日も早く臨終をのみ  
 待ち侍るなり。命の事は助かるべくも思ひ侍らねど、都の  
 人と承れば、ゆかしくこそ候へ。何とぞ、一日なりとも、この  
 苦しみを助け給はりて、横に臥して安らかに臨終を得し  
 め給はば、上もなき御惠」と、涙を流せる様げに見るさへあ  
 はれなり。

晝夜立ちて俯臥し居れば、足は柱の如く腫氣ありて、顔  
 も亦眼縁脹れ、額も浮きて、活きたる人の如くにもあらず。

ウツムウ  
 ハシキリ  
 ヤツト見えず

12 ぢつとカ  
 11 つけ  
 10 した  
 9 出来た  
 8 16  
 7 17  
 6 18  
 5 19  
 4 20  
 3 21  
 2 22  
 1 23

\* 廣島縣御調郡三原町。維新前は淺野氏が代代この城主であつた。

一しきり一しきり腹張り來る時の苦しみの聲、隣を動か  
 し、聞く者すら堪へかねたり。病體はまことにかくの如く  
 危く甚しけれど、その脈に見處ありければ、急ぎ藥を與へ、  
 なほ且つ藥湯を以て腰より漬し、種種の療術を用ひしか  
 ば、やがて大小用の通利出で來て、始めて横様になる事を  
 得たり。なほ品品の療治を加へ、この以後に用ふる藥方を  
 委しく書きしるして、用ひ方などまでも委しく傳へ置き  
 て、その家を辭して、數里の深山を分出で、三原の城下へ著  
 きぬ。

三原にてこの物語をせしに、さても危き事なりき。御心  
 に誠ありたればこそ、佛神の助もありて、誠の事に逢ひ給

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



善心(善心)

(18) 下着りう。  
 (19) うまもえ。  
 (20) 行。  
 (21) 云ったの。  
 (22) 無事。  
 (23) 歸した。  
 (24) 聞かれし。  
 (25) ありました。

ふならめ。多くは、かくの如き事は、盜賊の詐る事にて、旅する人を、人なき深山に連行き、刺殺して、金銀衣類を奪ふ事珍しからず。この後は必ず粗忽の振舞し給ふべからず。と云ひけるにぞ、始めて心づきて、恙なかりし事の嬉しかりき。

それより諸國を巡り、二年を経て京に歸り居たりしに、或日六條の旅宿のあるじ尋ね來り、二兩年以前、九州へ赴き給ひし御醫者は、此方なりや。と問ふ。如何なる用ぞ。と聞けば、備後の國より、六兵衛といふ百姓一人上り來り、下に市の字の附きたる御醫師を聞及ばずや。何とぞ尋ねくれよ。去去年、しかじかの事にて高恩に逢ひぬれば、御禮のた

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

(26) 善心。  
 (27) ましたの。  
 (28) 本。  
 (29) の。  
 (30) のに。  
 (31) 存。

めに來りたり。その御名は聞かざりしかども、荷物の下札に市の字を見及びたり。といふ。手がかりもなき尋ねやうかなと存じ候へども、その志の殊勝にも候へば、先づ試みに標札を見巡りて、市の字を見當て候へば、御尋ね申すなり。といふにぞ、その事あり。といへば、乃ち歸りて、その次の日、かの六兵衛同道して來りつつ、備後疊を自ら持ちて禮物とし、さても過ぎし年は、不思議の御縁にて、妻なるもの御療治に逢ひ、命はなきものと覺悟致し居り候ひしを、その日よりしるしを得、仰せ置かれし日限の如くに、難病も平癒して、再び常體の人となれる事、殊に近處の者の行逢より始まりて、御名さへ承らず候へば、弘法大師の來らせ

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

\*平安時代の初期にあらはれた高僧空海の諡號。眞言宗の開祖。



(32) の下あると  
 (33) 尋ねるも  
 (34) あれ事は何  
 せよ  
 思ふ事  
 古が

京都市の下京區にある眞言宗の總本山。延暦十五年(797)創建。弘仁十四年(843)嵯峨天皇は之を空海に賜はつた。

橋南谿 醫師。  
 名は春暉。伊勢の人。京都に出て醫を業とした。文化二年(三  
 四六)歿。年五十  
 三。

給ふなりとのみ、一村の評判にこそ致し候へ。京を尋ねたりとも逢ひ奉るべしとは圖らず候へども、命助かりし御高恩一言の御禮も申さざる心の中も安からず、若し逢ひ奉る事なくば、東寺にても参り候うて、弘法大師様へ御禮申して歸るべしと存じて参り候ひしなり。先づは尋ね當てて、日頃の本望に叶ひ候なり。とて、眞實顔色に現れたり。余も嬉しくて、暫しもてなし慰めて歸し遣りぬ。

都近くの者ならましかば、百里に餘れる海山を、いかではるばる尋ね來べき。邊土の民の篤實なる事、感ずるにも猶あまりあり。(橋南谿著「東西遊記」による)

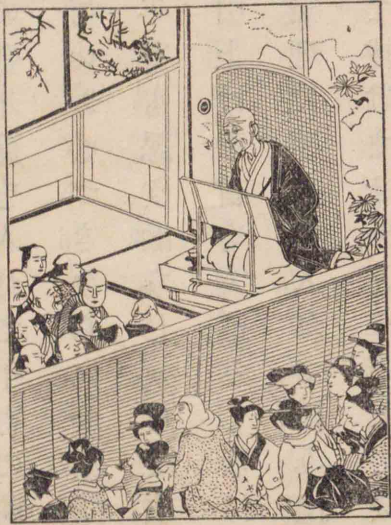
11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

學年試験

一五 執心の戒

(讀)(意味)

さるお町内に婚禮振舞がござりました。なにが、お年寄を始め、町役家持の人人、一同に座に著きますると、さまざまの馳走がある。時に、かの



心學講話席

年寄は酒と聞いては、笹の露にも酔ふ程の下戸ぢや。座中を巡る酒杯の間、退屈さうにしてゐられると、亭主方が氣の毒に思ひ、「お年寄様は御酒は召上らず、御退屈にござりませう。ちとお菓

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



子なりともお取り下されい。」と、南京の古染附こそめつの壺つぼに、大輪の金米糖を入れて、年寄の前へ持つて来る。座中も「これは好いお心づき、ひらにお菓子かしを召上られい。」と勧めるので、年寄も悪うはなし、「然らば頂戴とうがいを致いたしませう。」と壺を膝へ引上げ、手首てくわを突込みしなに、少しきしむやうに覺えたが、無理に手を差入れて、撮つまみ出さうとするに、手首が詰つままつて抜けませぬ。どうぞして抜けるかと、いろいろにこじ廻して見ても、引張つて見ても抜けず、まごまごしてゐらると、傍から見つけて、「どうなされましたぞ。」いや、手が少し詰つままりました、思ふやうに抜けませぬ。」と眞顔まへになつて言はるる。それは氣の毒。私が壺つぼを持つてゐませう。無理無體

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

〔一〕平家の侍大將。世に悪七兵衛景清といふ。  
〔二〕源義經の部下。十郎國俊。  
〔三〕「平家物語」卷十一「弓流の事」の條に見える話。景清は美尾谷の鍛かじを搦なんで引きちぎつて了つた。

〔四〕町内の世話取締などをする役名。  
〔五〕支那の宋代の學者。政事家。

に手をお引きなされ。」と、一人が向うへ廻つて壺つぼを搦なまへ、あとへ引くと、年寄は手を前へ引く。互にえいやと引合ふ有様ありさま。景清と美尾谷みおとが鍛かじ曳ひをするやうなと、座中が一同にどつと笑へど、年寄はなかなか笑はず、泣顔なみだになつて、「どうも痛んで抜けませぬ。」と言ふ。さあ、これから大騒おほさわになり、「醫者いしやどのを呼んで來い。」骨接ほねつぎでは行くまいか。」と、酒宴しゆえんの興も醒さめはてました。

時に五人組ごにんぐみが一人進み出て、「いづれもお騒さわぎなされな。我等承つたことがある。昔、司馬溫公しまたんこうといふ人、いとけなき時、大勢おほせいの小兒こわらと共に、大きな壺つぼのほとりに遊びました。が、一人の小兒こわら、過つてかの壺つぼの中へはまりました。大勢おほせいの

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



子供はこれを見て逃歸つたが、司馬溫公一人は歸らず、傍なる手頃の石を取つて、かの壺へ投げつけましたれば、壺はわれて、はまつた小兒は不思議に命を助かりましたと、或人の話ちや。今お年寄の御難澁はこの話によう似てある。いざや我等が司馬溫公となりて、たとへばその古染附の壺が、失禮ながら、何ほど高金の品でも、お年寄の腕には替へられぬ」と、しかつべらしく煙管を提げ、向うへ廻れば、年寄は氣の毒さうに、壺をかぶつた手を突出すと、ただ一撃に擊碎いた。なにが、座中は金米糖が散らかつて、雪を降らしたやうになると、やれ、お年寄、お助かりなされたか」と、その手を見れば、抜けぬこそ道理なれ、金米糖を一杯攪

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

でゐられたと申すことぢや。なんと可笑しい話ではござりませぬか。

攪んだものを離しさへすれば、自由自在に手は抜けるものを、一度攪んだら、首がちぎれても離すまいと、片意地な生れつき、それで自由自在の大安樂が出来ぬのぢや。かく申せば、<sup>せに</sup>錢金のことのやうなれど、攪むものはればかりではない。器量の好いのを攪み、賢いを攪み、負惜しみを攪み、家柄を攪み、身代の好いのを攪んで、離すまいと擔かぎ歩くによつて、教を聞くこともならず、樂をすることもならず、愼みも出来ず、せむ方なさに癢氣おさへたり、顔しかめたり、酒呑んで紛らしたり、さりとしては氣の毒なもので

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



ござります。壺わつて了うてからは、何言うてもせんないことぢや。身代の壺を破らぬ先に、御用心が第一でござります。

それでも、わが本心は明かな、明德は曇つてはゐない、洗濯するには及ばぬと思ふ人があるものぢや。これを譬へて申しまするに、私のやうな盲が一人旅をして、心やすい旅籠屋はたごやに泊り、明日の朝は七つななだちをさして下され。と頼む。亭主も心得、朝早う立たせまする時、盲は旅の支度を整へ、杖を持つて出ようとする、亭主が言ふには、まだ夜深いに、提灯をお持ちなされ。お貸し申しませう。何を言はつしやる。盲が提灯を持つて何にするもので、「いえいえ、お前

\*今の午前四時

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

には入りますまいけれど、暗がりをとぼとぼお出でなさると、往來の人が行きあたります。それで、提灯をお持ちなされと申すことぢや。「なる程さうぢや。私は行きあたりねども、得て目明が突當る。さやうなら、お貸し下されい。」と提灯をさげて、道五六町出ましたところが、向うから來る人が盲にはたと行きあたりました。そこで大きに腹を立てて、「おれに突當る奴は盲か。向うの人も癩癩にさはり、おれは盲ではない。さう言ふおのれが、どう盲ぢや。」いやいや、おれは盲ぢやけれども、人には突當らぬ。おのれが盲にきまつた。向うの人も愈、腹を立て、「おれを盲といふ證據は、何ぞおぼえがあつて言ふのか。」お、お、おぼえがある。おのれ

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



柴田鳩翁 心學  
者。京都の人。  
中年で盲目にな  
り、諸國を巡歴  
して心學道話を  
試みた。天保十  
年(西九九)歿、年  
五十七。

を盲といふ證據は、この持つてゐる提灯が、おのれが目にはかからぬぢやないか。」と、ずつと差出す提灯の火は、宿屋を出た門口で、とうに消えて了うてある。なんと氣の毒な盲ではござりませぬか。

火もこも點さぬ眞黒な提灯をさげて、これでも明かなと思つてゐるは、本心を見失うて、身勝手な心を本心ぢや本心ぢやと思ひ、洗濯せうとも、慎まうとも思はぬ人に、よう似たものでござります。どうぞ、お互に、火は消えてはないかと、日に吟味が致したいものでござります。

(柴田鳩翁述「續鳩翁道話」による)

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

第一節

一六 愛國心

社會を成して生活するのが人の本能である。隨つて、その住む處の社會乃至國家を愛するの亦人の本能である。如何なる國民もその國を愛せぬものはない。その方法その程度には多少の差異はあらうが、國を愛するといふ心に於ては、何れの國民も變りはない。その家族、朋友を愛し、その郷土を愛し、延いてはその民族、全體を愛するのは、蓋し人情の自然らしむる所である。併し、國を愛すると言つても、ただ盲目的にこれ愛するのでは可けない。各の國民は、その國家に就てそれぞれ

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



自覺する所がなければならぬ。それ故に、吾吾日本人は、この愛國心を全うするためには、立國の大義を明にし、國體の特徴を辨へ、さうして國體の精華を永遠に發揮することに努めなければならぬ。吾吾日本人は、この日本といふ國家を離れ、日本の國史を離れては、日本人たるの意味をなすことが出来ない。わが國が、君主國體として、萬世一系の天皇を戴き奉り、血族親愛の關係に於て、萬國無比の國を成してゐることは、吾吾國民の光榮とする所であつて、この天壤無窮の皇運を扶翼することは、實に吾吾臣民の本分であり、且つ吾吾の祖先の遺風を顯彰する所以である。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

竹第節

併し、愛國心に就て聊か注意すべきは、それが徒に國自慢となつたり、排外心となつたりせぬことである。如何なる國も、各、嚴然たる一大存在であるから、相互の國家の間に敬意を拂ふべきは當然である。自國を尊ぶの餘に、他國を卑しんではならぬ。大正天皇の平和宣言の大詔にも、進ンテハ萬國ノ公是ニ從ヒ、世界ノ大經ニ仗リ、以テ聯盟ノ實ヲ舉ケンコトヲ思ヒト宣はせられてある。わが國民として、わが君主國體の最も美しく、最も貴いことを信じ、わが國家の隆盛發展を圖ることに努力す。きは當然であるが、それだからと言つて、他國の國體を猥りに非議してはならぬ。米國人は、その

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



民主共和の國體を、米國人に取つて最も良きものとして、これを大切に思ひ、英國人は、その君主國體を、英國人に取つて最も良きものとして、これを尊んでゐることを否認すべきではない。各の國家には各の歴史があり、特徴があり、又各の國民が各の國家を愛する念慮に於て變るべき筈がないからである。恰も、どの家の子も、その家を愛する念に於て變りがない筈であるのと同じである。故に、互に各、その家を愛する心を尊重するが如く、相互にその國を愛する心をも是認し、尊重すべきである。

各の國家は歴史を異にし、環境を異にし、民情を異にしてゐる。わが國民の歴史は米國民の歴史ではない。故に、吾

第三節

吾はわが國體美を尊び、これを永遠に發揮することと努力しなければならぬが、彼等米國人がその建國の美を誇り、これを永久に維持しようと努めることを、不都合だと非難すべき理由はない。彼等が國民として當然の心掛を持つことに、敬意を拂ふのは當然である。これが國際的良心とも言ふべきものである。茲に於て萬邦協調して、世界文明の上、その特色美を競ふことが出来る。かの世界戦役に於て、獨逸が一敗地に塗れて、再び戦ふことの出来なかつたのは、獨逸國民が餘り國自慢で、排外的であつたことと原因することを忘れてはならぬ。

又、嘗に國自慢に陥らないだけでなく、國民は自國民の

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



長處や特質を自覺すると共に、その缺點や短處に就ても十分に自覺し、自警するの心掛が必要である。何事につけても、自ら顧み、己の短を知つて、改善して行くものは、必ず向上の途を進むことが出来る。一國民としても、その國民生活に就て、長處や美點を自覺すると同時に、缺點や短處をも能く悟り、自ら戒めるのは、その國民生活を向上せしめる所以である。かやうに考へて來ると、わが國民の道德意識に就て、今後大いに改善すべき點はないであらうか。わが國の風俗習慣、生活法に就て改善すべき餘地はないであらうか。此等の事柄に就て深く省み、戒め、進んで改める所がなければなるまい。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

大島正徳 教育家。東京帝國大學文學部出身。同大學助教授。東京市學務局長に歴任。現に同大學講師。日本女子大學校教授。東洋大學教授。帝國教育會專任理事。

顧みるに、學問技藝に關して、從來わが國民の間から、如何なる大思想、大發見、大發明が出たであらうか。又、世界文明の上に如何なる貢獻をなしてゐるであらうか。勿論、西洋と交際して、彼等の文明に接したのは、まだ日の淺いことであるから、彼等の文明を吸収、同化するに忙しく、未だわが國の特殊の文化を發展させて、世界に光被させるに至つてはゐないが、既に明治維新以來六十餘年の歲月を経た今日に於ては、吾吾は自ら發憤、努力して、進んで世界の文明に寄與するの覺悟がなくてはならぬ。

(大島正徳著、公民道德による)

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



一七 我不關焉

*wore kan seyan*

「我不關焉」といふ言葉は、我我が日常よく使ふ言葉である。

私は上海へ行く時には、一品香といふ支那旅館へ泊る

ことに殆ど決めてゐる。その旅館は西藏路といふ處にある。其處は片側街で、一方は競馬場に接してゐて、道幅は廣

いが、電車が通つてゐないので、落著いた感じがあつて、氣

持が好い。

或朝、私が表の街路を散步して引返して來ると、旅館の

少し手前の處で、一人の苦力が、一輪車を道路へ引繰返し

て、それを起さうとするが、一人では起すことが出來ない

ので、非常に困つてゐた。荷物を大分つけてゐて、相當に重

たいせゐもあるが、一體あの一輪車といふものは調子一

つで推して行くもの

であるから、若し舵を

取損つて横倒しに

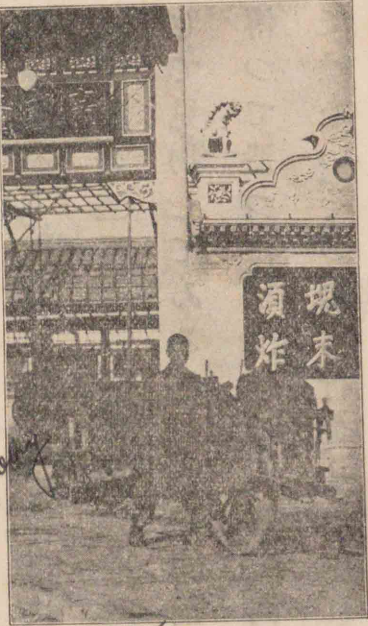
したら、まつたく始

末が悪い。誰か手傳つ

て遣らないことには、容易に起上らせることは出來ない。

早く誰か手傳つて起して遣れば好いのにと思つて見て

ゐたが、通行人は少なからずあつても、誰も彼も平氣で見



苦力車の力

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



流して通つて了ふ。

往來の向側には、人力車夫が十臺ばかり車を並べて客待をしながら、この様子を眺めてゐるが、みな面白さうに笑つてゐるだけで、誰も手傳ひに來ようとする様子がな  
い。旅館の二階や三階の窓からもボーイ達が太勢顔を出して見物してゐる。そこで私は止むを得ず、力を貸して手傳つて遣つた。私は別に人前で同情家振らうとしたわけではない。その場へ行合せて見れば傍觀しても居られな  
い。大して力の要る仕事でもないから、手を貸して遣つたまでである。車は難なく起上つた。すると苦力は有り難うとも何とも言はないで、眞黒な顔の汗を拭ひもせず、不愛

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

想な佛頂面をして、ちらつと私の顔を見ただけで、黙つて車を推して行つて了つた。私は苦力から感謝の言葉を期待してゐたのでもないから、そんな事は氣にも留めなかつた。

一體支那の人は容易に有り難いと言はない場合がある。たとへば、物を贈呈した時誠に迷惑さうな顔をして黙つてゐるので、快く受けてくれたのか、さうでないのか、一寸分らないことがある。それは物を貰つて有り難さうな顔を見せたり、喜んだりするのは、不見識だといふばかりでなく、その外に、*gomi harabu* なる意味がこもつてゐる。さて、私が掌の塵を拂ひながら旅館の方を見ると、例の

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



ボーイ達は如何にも可笑しきうに笑つてゐた。その朝、私は新しいモーニングコートを着込んで、かなりめかしてゐたから、いまの動作が特に滑稽に見えたのだらうと思つた。それから自分の部屋へ戻つた。すると、直ぐボーイが来て、先生、貴下は何故あんな事をしたのです。と言つた。その顔付には、咎めるやうな、嘲笑ふやうな色があつた。私は軽い不快を感じた。私は決して褒められたくはない。褒められたら、却て赤面するだらう。併し、少なくとも、批難されたり、嘲笑されたりする理由はないと思ふのだが、それ程の言葉は、通譯する人がゐなくては、私には言ふことが出来ない。ので、何とも辯解しないで、苦笑してゐた。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

かういふ場合に、支那人は實に冷淡である。全く文字通り我不關焉である。自分の身に關係のない事なら、何が起らうと平氣である。知らぬ顔をして見てゐる。目の前で首を吊る人があつても、手を束ねて眺めてゐるかも知れない。場合に依ると、冷淡とも無情とも言ひやうがないやうに思へる。それ位だから、まして法律上の掛り合ひなどに至つては、これを恐れること蛇蝎よりも甚しい。勿論、何處の國民だつて、裁判所や警察署へ引張り出されることを喜ぶ者はないが、併し物には程度がある。自分に後暗い事さへなれば、吾吾は平氣で何處へでも行く。ところが、支那人は、若し隣家の者が冤罪を被つて獄に投ぜられた

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



時、自分が行つて、たつた一言證言すれば、直ぐにその人の罪が赦されるといふやうな場合でも、自ら進んで證人になつて行くやうな事は少ないのである。實際、支那のやうな國情ではさういふ程度の掛り合ひから、或は自分の身にどんな災難の飛沫が來ないとも保證し難いから、觸らぬ神に崇<sup>た</sup>なして、大抵は見捨てて置くのである。彼等に取つて大切なものは、自分の生活だ。他人の事は他人自らがする。泣かうが笑はうが、死なうが生きやうが、物を盗まうが奪はれようが、それが他人の事なら總て我不關焉<sup>わがま</sup>だ。これくらゐ固く自分の立場を守つてゐないと、實際に危険なのである。この極端な個人主義的思想が、前のやうな些

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

細な場合にまで現れて、他人の事には手を出さないの  
ある。

一輪車の事件は、私は間もなく忘れて了つたが、その當時、私自身の氣持では、決して餘計な事をしたとは思はなかつた。ボーイに笑はれても、それは笑ふ者が無理解で、沒常識なのだから、仕方がないと思つてゐた。然るに、その後、に又かういふ事があつた。或學問のある支那の老人と一緒に街を歩いてゐた時、橋の袂に一寸し坂があつて、其處で一臺の荷車が行惱んでゐた。これは普通の二輪車だ。た。人は織るが如く通つてゐるが、此處で一人として振向いて見る人がない。私は例の一寸した深切心を起し

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1





上海城内の古建築

答へた。

て、その荷車を後から推して遣つた。車は難なく坂の上に  
 達した。ところが、例の老人は、私が  
 近づくと、恐しく不機嫌な顔で通  
 譯をする日本人を通じて私を叱  
 りつけた。  
 貴下は何故今のやうな詰まら  
 ぬ真似をするのか」と、先づ老人は  
 かう言ふのだ。  
 私は、車が動かないので、氣の毒  
 だつたから、推して遣つたのだ。」と

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

すると、老人は重ねて言つた。車が動かなくても、それは  
 貴下に關した事ではない。車を引くのはあの車夫の仕事  
 である。若し車が動かなければ、彼處にあの通り立ん坊が  
 ある。立ん坊に錢を遣れば推してくれ。それをあの車夫  
 は錢を惜しんで、自分勝手に難儀をてゐるのだ。人には  
 各、自分の務があり、立場がある。何の關係もない貴下が、横  
 から飛びだして行つて、車の後推しをするなどといふ事  
 は、支那にはない習慣である。  
 さう言はれて、私は今更赤面して了つた。道德といふも  
 のは、多くの場合、習慣の中から生れて來る。習慣が異なれ  
 ば、自然、道德も異なつて來る。私の行爲は、其の習慣を無視

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



村松梢風 文學者。名は義一。慶應義塾大學に學んだ。

尾上柴舟 文學博士。名は八郎。東京帝國大學文學部出身。東京女子高等師範學校教授。女子學習院・早稻田大學の講師、兼ねて東洋大學教授である。

した、輕卒な振舞だつたのである。  
「我不關焉。」やはり支那では、それでなければいけないのだ、と私は感じた。  
(村松梢風著「支那漫談」)

旅の歌

(尾上柴舟)

ふと逢ひて遂に再び逢ひえざる人とおもはで別れ  
もあるか (松花江にて)  
いはねども心と心あひ通ふ  
もあるか (松花江にて)  
ふと逢ひて遂に再び逢ひえざる人とおもはで別れ  
もあるか (松花江にて)

*Uranige naku atsuta hitoto shinae made mo nido to ya  
chubeta mo okina hita da to mo omoyami wakete  
kimashita.*

一八文字

我が國に於て一般に用ひる文字には、漢字と和字と假名との三種類がある。  
漢字は支那から傳はつたもので、その字體には、古文・篆書・隸書・楷書・行書・草書の六體があるが、印刷などに普通用ひるのは楷書である。然るに、等しく楷書といふ中にも、古文篆隸より直接に變化して來た正體の楷書の外に、所謂俗字及び略字と稱するものがある。例へば、間決・劔・僊・牀・氷・稟

古文	上	下	左	右
篆書	上	下	左	右
隸書	上	下	左	右
楷書	上	下	左	右
行書	上	下	左	右
草書	上	下	左	右

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



はその俗字、邊澤聲亂、實體當は正體で、辺沢声乱、実躰當はその略字である。俗字や略字も、既に久しく慣用せられたものは、奇古なる正體よりも實用上便利であるが、昔の書物などを讀む爲に、その正體をも知つて置く必要がないではない。

その俗字や略字は、支那本國で既に用ひられ、又我が國で少しく改めたものであるが、和字に至つては、全く日本で作つたものである。働、凧、風、込、込、込、逆、糲、粉などのやうに、漢字に倣つて新に字形を作つたもの、伽、咄、掙、椿、沖、萩などのやうに、漢字にもこの通りの字形はあるが、全く別の意味に用ひたもの、坏、梓、詫、溶などのやうに、漢字の一部分を

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

改作して他の意味に用ひたもの、及び腺、哩、吋、籽、糲、厨などのやうに、西洋の醫學や數學が傳はつてから新に作つたもの、此等は皆和字である。

假名も亦漢字から出たもので、凡そ奈良朝の末から平安朝の前半にかけて、一般に用ひるに至つたものである。平假名は漢字の草體を更に簡易にしたもの、片假名は漢字の偏旁冠などを採つて作つたものであるが、此等はただ音を表はすのみで、意味を表はすことはない。これが假名の特色で、その性質上、漢字や和字よりは寧ろ羅馬字に近いのである。

以上三種類の文字の中で、假名は音を表はすのみであ

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



る。和字は概して訓のみで、音はない。然るに、漢字は我が國に於ては、音と訓との二様の讀方があつて、又その音にも訓にもさまざまの種類がある。

先づ音に就て言ふと、行狀、行李、行燈、經文、經書、看經、京都、京師、南京の行、經、京の如きは、それぞれ違つた音で讀まねばならぬ。その行狀、經文、京都の類は所謂吳音で、日本に最も早く傳はつた爲に、佛教に關する語や普通語に頗る廣く用ひられてゐる。行李、經書、京師の類は所謂漢音で、唐の文化が盛に輸入せられた時代に、朝廷の獎勵によつて流布したものであつて、漢籍は多くこれを用ひて讀むことになつてゐる。行燈、看經、南京の類は宋以後に傳はつた音

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

で、唐音と稱してゐるが、唐時代の音といふ事ではなくて、ただ唐土の音といふ意味である。但しこの種類の音は、極めて稀に用ひられるのみである。この外に青島、漢口、廣東、上海、香港などの如く、現代の支那音を用ひることもあるが、これはただ本邦と交通の頻繁な土地の名などに、僅に用ひられるのみである。

この唐音や現代の支那音も、かの地の發音に比べると、既に幾分か訛つてゐるのである。吳音は支那の南方の音、漢音は北方の音を傳へたものであるが、共に原音のままではなくて、餘程變化してゐることは言ふまでもない。訓にも様様の種類がある。漢字一字に國訓を附したも

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



(一) Tunnel.  
 (二) Match.  
 (三) Pomp.  
 (四) Pao.  
 ボルトガル語。

の例へば日月山川草木の類漢字二字の熟語に國訓を附したものの例へば從弟・伯母・海苔所以所謂加之の類或はこれに西洋語の訓を附したものの例へば隧道<sup>(七)</sup>・燐寸<sup>(八)</sup>・唧筒<sup>(九)</sup>・麪包の類此等は皆漢字本來の意義に従つて訓讀するものであるから正訓といふ。然るに草臥・七夕・團扇・流石・五月蠅しの如き訓は漢字本來の意義とは多少違つてゐるが相似たところがあつて之を當てたのであるからかかる種類のものを用意といふ。

漢字には以上の如く種種なる讀方がある。そこで今或漢字を讀む時に之を音讀すべきか訓讀すべきか或は如何なる音如何なる訓で讀むべきか頗る疑はしい場合が

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

本文は編者佐佐政一が特に本書のために書いたものである。

ないではないが大抵は國語の習慣や前後の關係や送假名等によつて判定することが出来る。その中で漢語で出來た熟字は音讀する時は二字共に音讀し訓讀する時は二字共に訓讀するのが正則である。但し國語と漢語とが連合して熟字となつた時は敷地・奥行の如く音訓を交へて讀むことがある。又正則ではないが重箱・合羽・團子・出立のやうに音の下に訓を連ねて讀むこともあり湯桶・小僧身分のやうに訓の下に音を連ねて讀むこともある。

これを要するに言語文字のことは一に慣例によつて定まるもので久しき習慣のあるものは正則ではなくても亦これに従はねばならぬ。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



一九 漢語と漢文

漢字の我が國に傳はつたのは、いつの頃であつたか、その年代はもとより詳かでないが、應神天皇の御代(三)は、百濟の博士王仁が來朝して「論語」「千字文」を獻じ、皇子菟道稚郎子が王仁を師として學問せられたといふことは、歴史に明かなところである。これより歷朝の御獎勵によつて、漢學は次第に隆盛に赴き、學問といへば漢文を學ぶことであり、文を作るといへば漢文を綴ることであつた。

當時我が國には定まつた文字といふものがなかつたから、直にこの外來の漢字を採つて、我が國語を寫すこと

(二) 天皇御即位の第十六年(九〇五)二月、王仁來朝。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

も漸く工夫されて、或はその音を假り、或はその訓によつて、「波流能波奈」等里我奈久「宇奈波良爾霞多奈姬久」今朝鳴而行之雁(ナ)などと記された。これが後に、漢字を省筆し、又はその行書草書等によつて假名が作られるに及んで、始めて我が國語を自在に寫して、優雅な國文をも綴り得るやうになつたのである。

かやうに、一面には假名の發明によつて國文も容易く書き綴られるやうになつたが、國文は未だ僅に當時の婦女子の間に行はれるに過ぎず、男子の學問としては、なほ漢學が主であつたから、總ての公文書を始め、諸の記録も通信の文も、さては詩文などの如き、文藝に屬するものま

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



だが、大方は漢字を以て漢文流に記されたのであつた。  
 かかる状態であつたから、自然に我が日常の國語の中  
 にも、漢語が次第に流入して、それが年處を経るに従つて  
 國語とよく融和するに至り、漢語はもはや漢文としての  
 漢語ではなく、我が國文としての漢語となつて、遂に我が  
 國語の中に同化して了つたのである。

今日我々の常用語として用ひる「修身」「讀書」「作文」の如き  
 語も、その源を質せば、身を修む「書を読む」「文を作る」といふ  
 意味の漢語である。蓄音機「寫真術」といふも、音を蓄へる機  
 械「眞を寫す技術」といふ意味で、漢語で出来てゐる。不愉快  
 といひ、無趣味といひ、未曾有といひ、不可思議といふも、又

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

は一舉兩得の策とか、不俱戴天の仇とか、一人當千の强者  
 とか、不得要領の話とかいふのも、皆これ漢語漢文をその  
 ままに國語として用ひてゐるのである。

かやうに、漢語漢文は、今日ではもはや我が國語と離し  
 得ない關係にあつて、漢文を読み、漢語を解するものでな  
 ければ、我が國語の眞の意義を解し、我が國文を自在に綴  
 ることは出来ないのである。併し、漢語漢文の研究の必要  
 な所以は、獨りこればかりではない。我が國の思想・道德・宗  
 教・文藝などは、千數百年來漢文によつて培はれて來たの  
 であるから、苟も我が國の文化の跡を尋ねようとする者  
 は、先づ漢語漢文を解することから出發すべきであると

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



言つても可い。

さりながら、漢語漢文は文字がむづかしく、殊に漢文は我が國文とは餘程趣を異にするものであつて、その學習には相當の注意と努力とを拂はねばならぬ。今、我が國文と漢文とを對比して、その二三の例を示せば、

花開き鳥啼く。

花開鳥啼。

學を修め業を習ふ。

修學習業。

禍は口より出で、病は口より入る。

禍自口出病自口入。

泰山は土壤を譲らず、故に能く其の大を成す。

泰山不讓土壤故能成其大。

のやうに、漢文は我が國文とは著しくその姿を異にする。これを我が國文と同じやうに讀ませるために、その漢字の左側につけたレ・ニなどの符號を反點といひ、又その右側につけたキ・ク・メ・ヲなどの假名を送假名といひ、そして、かやうにして漢文を讀むことを訓讀するといふ。なほ漢文を訓讀するには、口語によらないで、文語を以てする習慣であるが、それには一種の調子が備はつてゐて、現今普通に行はれてゐる文語文とも稍趣を異にしてゐる。これを漢文調といふ。例へば、

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



志ある者は事竟に成る。|| 有志者、事竟成。

一寸の光陰輕んずべからず。|| 一寸、光陰不可輕。

學若し成る無くんば死すとも還らず。|| 學若無成、死不

還。

身體髮膚之を父母に受く。敢て毀傷せざるは孝の始な

り。|| 身體髮膚、受之父母。不敢毀傷、孝之始也。

父父たらずと雖も、子は以て子たらずんばあるべから

ず。|| 父雖不父、子不可以不子。

かくの如き調子の文體も、漢學の盛んな時代には、風を  
なして行はれたもので、明治の初年頃に於ては、これが普  
通の文體の規格となつて居た位であつた。然るに、その後

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

次第に西洋の書物が普く讀まれるに及んで、自ら西洋の  
詞章の文脈が加味せられることとなり、また言文の一致  
が唱へられ、口語文が發達し、加ふるに古い國語國文を尊  
重愛護する人も現れたので、普通の文語文も此等の種  
の影響を受けて、漸く所謂漢文調を遠ざかつて今日に及  
んだのである。けれども、まだ全然漢文調の文を見なくな  
つたとは言へないばかりでなく、我等が日常用ひる言語  
文章には、漢字を以て新しく創められた熟語などが、以前  
よりも一層多く交へられて行く趨勢であるから、漢語漢  
文の研究は今後に於ても大いに必要であると思ふ。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



二〇

諭言四束

(教訓四つ)

鹿の兒あり、母に隨ひて出でて遊ぶ。騎benjiして弓を手にし、  
 矢を負へる者を見る。母の曰く、「汝彼の肩benji上に在る者を知  
 れるか。飛び來りて身に入る時は、必ず死なん。汝それ急に  
 これを避けよ。」と。鹿の兒首を掉kurawひて曰く、「兒giしばらく、その  
 飛び來る、果して何の狀をなすかを試みんとす。」と。母に隨  
 ひ去らず、遂に矢に中りて死す。世には頑かたにして教(身背地)に従  
 ふことを知らざる。或は此くの如き者あり。  
 一小猴、人の髭higeを剃るを見て、刀を偷ぬすみ、これに擬なぞへ自ら  
 その鼻を傷つく。世の習はずして事に従ふ者、多くは此の

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

顔かほをかめり、  
貴たか、

類のみ。

栗くり、鼠樹ねずみじを攀よぎちて胡桃くるみを摘とみ、その青皮あおかわを嚙か破やぶり、顰しん蹙しゆし  
 て曰く、「何なにぞその苦にがきや。」と。既すでにして核かくに及およぶ。乃すなはち笑わらひて  
 曰く、「先まづ苦にがを喫くせ。んば、安やすんぞ此この滋味じを得ること有あら  
 ん。」と。

一農父いぬちちあり、兒こを携たづなへて、出でて麥あわの熟うるか否いかかを檢しらべ  
 す。兒聞いひて曰く、「この麥あわの穂ほを見るに、或は昂たかく、或は俯ひす。  
 知らず孰いれい貴たかき。」と。父兩ふたながら、その穂ほを握にぎきて、之を諭さとす。  
 して曰く、「内充實うちじゆうじつすれば必ず下る。夫おのの抗然かうぜんとして屈かする  
 ことを知らざる者の如きは、皆その未熟みじくなるに由りてな  
 り。」と。

11

10

9

8

7

6

5

4

3

2

1

那珂通高 漢學  
者。岩手縣の人。  
明治十二年歿。  
年五十二。

(洋洋社談所載、那珂通高の文による)



二一 訓話二題

一、否の一語

人のこの世に處するや、事の次第によりては、否の一語を言ふの勇なかるべからず。何となれば、誘惑の事及び罪惡の事は、その始に當りては、甚だ些少なるが如くなれども、その中に陥るに及んでは、遂にその圈套を脱出する能はざるに至る。故に、始より毅然として「否」と言ひて之を拒むべし。否、我は之を爲す能はず」と言ふべし。然るに、世人を觀るに、能くこの否の一語を言ふの勇氣ある者少なし。

否の一語を言ふ能はざる一種の人あり。他の意に違ふを怖るるに由るや、他人の意に順ふを欲するに由るや、確

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

題辭  
嘉言ト善行トハ、童ノ時ニ宜シク染濡スベシ。終身性ニ存記シテ、肌膚ニ雕鏤セル如シ。聖功ハ蒙養ニ在リ、其レ豈ニ忽ニス可ケンヤ。  
敬字中村正直

に知り難しと雖も、此の人は他人に頼まるる事を辭せず、或は金錢を貸し、手形に裏書し、或は證人に立ち、遂に之が

題辭

嘉言與善行。童時宜染濡。終身存記性。如雕鏤肌膚。聖功在蒙養。其豈可忽乎。

敬字中村正直



中村正直筆蹟

爲に累を受け、その身その家を傾くるに至るなり。人、當然の時に於て否の一語を言ふは、安全の道なり。蓋し、許多の人、否の一語を言ふ能はざるに由りて、その身、その家を傾くるに至る。否の一語を言ふの勇氣あらざれば、罪惡に地歩を占めらるるなり。

歡樂の事、我を誘引せんとして、我を試みる時は、直に否といふ決心を有せざるべからず。此の決心は、徳行をして

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



益、堅固ならしむ。若し始に於て一步を譲り、否といふ事を怠らば、自己に信賴するの力これよりして退き減ずべし。然るに、否の一語を言ふに、始は其の難きを覺え、大いなる努力を要すれども、久しき後は、自然に勢力増加して容易となる。怠惰、惑溺、其の他諸の惡習の襲撃を防がんには、否の一語より外は有らず。故に曰く、「當然の時に於て否の一語を言ふは、大いなる徳行なり。」と。(中村正直譯「西洋節用論」)

二、勤勉と耐久

絶大の事業を成すには、奇術、妙法あるにあらず、又大才、睿智を要せず、平常なる工夫に由りて得らるべく、又平凡なる資質の人にて爲し得らるることなり。如何にとなれ

中村正直 文學博士。號を敬宇といふ。東京の人。儒學・蘭學・英學に通じてゐた。東京女子高等師範學校長・東京帝國大學教授・貴族院議員等に歴任。明治二十四年歿、年六十。

ば、善く心を用ふれば、目前通常の事みな善き經驗となり、これよりして大いに開悟、發明の益を得ることあるものなり。又敗績を取りたることは、眞成の勉強の人の爲には、勇猛、精進の力を發出し、自ら其の身を修むる所以の具となることなり。人の平安に日を度(わた)ることは、歩歩實地を踏みて、善く適當して事を行ふに由りて得らるることなり。人の極めて能く久しきに耐へ、及び極めて能く眞正の志氣あるものは、極大の功績を奏するなり。

「福運は盲人の如くにして、人を辨ぜず。」と云ひて、これを咎むるものあれども、決して然らず。福運は實に眼目を具へたり。抑、世人の生涯を觀る時は、福運は常に勤勉なる人

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11



の側に傍ふこと、恰も順風・穩波の航海に巧なるものに隨ふが如し。人の學問を爲すに、たとひ高尚なる學科と雖も、凡庸の才質を以て、心を用ひ、功を積み、久しきに耐ふれば、必ず成就の地位に到るべし。たとひ卓越の才ある人と雖も、心を用ひず、功を積まず、久しきに耐へざれば、一事をも成就すること能はず。故に卓越の才は、學問の爲に必要にあらざることなり。絶大の豪傑と稱せらるるものと雖も、大率<sup>おほむね</sup>は卓越の才性ある人にあらず。ただ資質平等なる人の、久しきに耐へて、大業を成就せるものなり。或人曰く、「英才と云ひて、別に一種の才あるにあらず。常人の憤發切至せるものを英才と云ふなり。」と。

(中村正直譯「西國立志編」)

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

二三 雛僧三條

\*徳川家康

\*太公諸老臣と物語し、問うて曰く、「汝等雛僧三條の話を聞けりや。」と。皆曰く、「未だし。」と。乃ち太公曰く、「昔、山僧あり。雛僧を里に迎へ、晨夕以て使役に供せり。一日、雛僧逃れ歸り、泣きて其の父に訴へて曰く、「兒既に出家す。艱苦は固より其の甘んずる所なり。但し師の我を遇すること甚だ無狀にして、殆ど堪ふ可からざる者あり。其の一、師毎<sup>つね</sup>に余をして其の頭を剃らしむるに、偶、一たび刀を誤りて血を見れば、則ち鞭撻直ちに下る。其の二、晨起きて味噌を播る毎に、師研法の精ならざるを瞋り、呵責すること至らざるなし。」

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



其の三、余内逼りて起つ毎に、師は冷眼に之を送つて曰く、  
 汝又復廁に上るか。』父聞きて怒り、走り往きて山僧を見  
 て曰く、『賤兒久しく師恩を辱くす。今已むを得ざる事あり、  
 敢て請ふ、兒を受けて以て歸らん。』と。山僧其の辭色を察し、  
 徐に叩くに故を以てす。乃ち曰く、『兒吾に云々と告げたり。』  
 と。山僧曰く、『是れ辯ぜざる可からず。其の頭を剃るは、則ち  
 渠かみ既に其の頂を圓にせり。薙髮の勞は之を人に委ぬ可か  
 らず。故に我吾が頭を借して、以て刀を學ぶの地と爲さし  
 む。今は則ち自ら其の頭を剃るに至れり。獨り余の頭を剃  
 るに及べば、故意に刀を誤りて、創痕縦横なり。其の味憎を  
 播るは、則ち凡そ僧俗の家を問はず、味憎を播るには、必ず

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

大槻鑿溪 仙臺  
 藩の儒者。名は  
 清崇。明治十一  
 年歿、年七十  
 八。

研槌を以てす。渠は獨り木杓を以てす。故に随つて播れば  
 随つて折る。毎晨二三折に下らず。其の上廁は、則ち本寺新  
 に一圍を造り、獨り以て縣吏來宿の用に充つ。渠は其の近  
 くして且つ淨きを利とし、便する毎に輒ち往く。之を禁ず  
 れども止まず。』と言未だ畢らざるに、父拜謝地に伏して曰  
 く、『小人、師の厚誨の此の如きを知らず、徒に兒の言を聽き  
 て、以て之を疑ふ。慚悔の極、穴の入る可き無きのみ。』と。是れ  
 一場の話説なりと雖も、苟も治人の責にある者は、皆意を  
 此に留めざる可からず。然らざれば則ち偏聽にして人を  
 誤り、忠邪地を易へて、雛僧の父たらざる者は殆ど稀なり。  
 汝等其れ牢記して、忘るる勿れ。』と。(大槻鑿溪著「近古史談」による)

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1



二三 學訓三則

志を立つる事は、大にして高くすべし。小にして低ければ、小成に安んじて成就し難し。天下第一等の人とならむと平生志すべし。世俗と同じく、賤しく低くすべからず。かく志を立てて、日日月月に勉め行はば、久しくして其の功積り、必ず人に勝るべし。上を學べば中に至り、中を學べば下に至る。下を學べば功をなさず。又心は小にして低くすべし。人に遜り、日用常行の低き足下より行ふべし。心大なれば、驕りて慎みなく、細行を勤めず。高ければ、人に高ぶりて、謙徳を失ふ。

千里の道も一歩より始まる。學んで道に至るも亦かく

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

の如くなるべし。志を立てて道を學び、勉め行ひて止まず、久しく年を積まば、などか其の功を成して、遠大に至らざらむ。譬へば、商人の一錢を惜しみ、積重ねて久しく年経れば、大なる富人となるが如し。

疑を人に問ふは、智を求むる道なり。自ら心に道理を思ふは、智を開く本なり。問ふは智を人に求むるなり。思ふは智を吾に求むるなり。人に問はざれば、知る事狭くして心に迷解けず。自ら思はざれば、見聞く事廣しといへども、道理を吾が心に深く自得せず。此の故に、問ふと思ふとの二つは、理を究め、智を明かにする道にして、學の要なり。

(貝原益軒著「大和俗訓」による)

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

貝原益軒 儒者。名は篤信。筑前の人。世世黒田侯に仕へて醫を業とした。山崎闇齋・木下順庵などの門下。正徳四年(三三)歿、年八十五。



二四 俚諺抄

○日暮れて道遠し。

日暮道遠。(唐書)

○先んずれば則ち人を制す。

先則制人。(史記)

○玉磨かざれば光なし。

玉不磨無光。(實語教)

○疑心暗鬼を生ず。

疑心生暗鬼。(列子)

○前車の覆るは後車の戒。

11 10 9 8 7 6 5 4 3 3 1

前車覆後車戒。(說苑)

○精神一到何事か成らざらん。

精神一到何事不成。(朱熹)

○百聞一見に如かず。

百聞不如一見。(漢書)

○渴しても盗泉の水を飲まず。

渴不飲盗泉水。(陸機)

○毛を吹いて疵を求む。

吹毛求疵。(漢書)

○虎穴に入らざれば虎子を得ず。

不入虎穴不得虎子。(漢書)

11 0 9 8 7 6 5 4 3 2 1



○人は死して名を留め、虎は死して皮を留む。  
人死留名、虎死留皮。(朝野僉載)

新撰國語讀本 二昭和卷二 終

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

同字表

掲ゲル所ノモノハ普通ニ用ヒラレル範圍ノモノデアアル

カ	エン	エン	エン	エン	エン	エイ	エイ	ウン	ウン	イン	イン	イツ	イツ	イ	アン	アン	アウ
箇	宴	豔	鹽	焰	煙	詠	穎	溫	鬱	蔭	陰	逸	祐	頤	按	庵	鶯
個	醜	艷	鹽	焰	烟	咏	穎	温	鬱	蔭	陰	佚	佑	頤	案	菴	鶯
カ	カ	カ	カ	カ	カ	ガイ	ガイ	ガイ	ガイ	カイ	カイ	カイ	ガ	ガ	カ	カ	カ
校	敲	橐	坑	倣	效	岡	槩	礙	崖	蓋	劉	界	屆	鶯	峩	廈	花
技	敲	稿	阮	効	効	崗	概	碍	岨	蓋	苒	堺	屆	鵝	峨	厦	花
キ	キ	キ	キ	キ	キ	ガン	ガン	カン	カン	カン	カン	カン	ガク	ガク	カク	カク	ガウ
碁	歸	熙	鳳	器	規	巖	雁	鑑	鹹	姦	簡	閒	學	嶽	貉	鶴	濠
碁	棋	飯	熙	鳳	規	巖	鴈	鑒	鹹	奸	簡	閒	孝	岳	貉	鶴	壕
グ	グ	ク	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	キ	ギ	キ
フ	フ		ヨ	ヨ	ユ	ユ	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ	ヤ	ツ	ウ	ウ	ウ		キ
臥	畫	驅	凶	虛	窮	躬	卻	鄉	京	競	強	況	吉	糾	鯢	廐	戲
卧	畫	驅	兇	虚	窮	躬	却	郷	京	競	強	况	吉	糾	嗅	厩	戲
ケ	ケ	ケ	ケ	ゲ	ケ	ケ	ケ	ケ	グ	グ	ク	ク	ク	ク	ク	ク	ク
フ	フ	フ	ツ	キ	イ	イ	イ	イ	ン	ン	ン	ン	ン	ン	ン	ン	ン
胸	脇	協	決	隙	憩	雞	谿	徑	慧	羣	玩	款	館	關	函	闊	怪
脅	脅	叶	決	隙	憩	鷄	溪	逕	惠	群	翫	欸	館	関	函	濶	恠
サ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	コ	ゴ	コ	ゲ	ケ	ケン	ケン	ケン
ク	ク	ク	ク	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ン	ン	ン	ン	ン
鎖	穀	剋	國	黑	控	闕	寇	恆	互	侯	拘	句	吳	鼓	減	劍	險
鎖	穀	剋	國	黑	扣	闕	寇	恒	互	侯	拘	句	吳	鼓	減	劍	險

附錄 同字表



シ	シ	シ	ザ	サン	サン	サン	サン	サン	サン	ザ	サ	サ	ザ	ザ	サ	サ	サ	サ	
姉	柿	絲	慚	蠶	懣	鑽	讚	贊	笄	雜	插	作	冊	像	象	帝	雙	桑	蓑
姉	柿	糸	慚	蠶	懣	鑽	讚	贊	笄	雜	插	做	冊	像	象	帝	雙	桑	蓑
シ	シ	ジ	シ	ジ	シ	シ	シ	シ	シ	ジ	ジ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ
處	煮	準	候	呪	澀	牆	嘗	牀	讎	收	爾	辭	俟	廁	皆	嘴	弛	紙	顯
處	煮	準	候	呪	澀	牆	嘗	牀	讎	收	爾	辭	俟	廁	皆	嘴	弛	紙	顯
セ	セ	ゼ	ス	ス	ジ	ジ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ	シ
整	聲	塔	蕊	醉	垂	盡	刃	唇	晉	眞	囑	飾	職	冗	稱	松	證	昇	敘
整	聲	塔	蕊	醉	垂	盡	刃	唇	晉	眞	囑	飾	職	冗	稱	松	證	昇	敘
ダ	ダ	ソ	ゾ	ソ	ソ	ソ	ソ	ソ	セ	セ	セ	セ	セ	セ	セ	セ	セ	セ	セ
墮	拏	村	屬	卽	窓	總	蘇	疏	龜	僊	翦	僭	潛	船	籤	織	氈	竊	鈔
墮	拏	村	屬	卽	窓	總	蘇	疏	龜	僊	翦	僭	潛	船	籤	織	氈	竊	鈔
チ	チ	チ	チ	チ	チ	チ	タ	タ	タ	タ	ダ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	ダ	ダ
猪	厨	蟲	著	場	腸	癡	恥	擔	膽	歎	託	鬧	搗	黨	鳥	韜	體	陀	陀
猪	厨	蟲	著	場	腸	癡	恥	擔	膽	歎	託	鬧	搗	黨	鳥	韜	體	陀	陀
ニ	ト	ト	ト	ト	ト	ト	デ	テ	テ	テ	テ	テ	テ	チ	チ	チ	チ	チ	チ
肉	遜	同	鬪	燈	妬	睹	免	腎	纏	點	鐵	嘲	弔	隄	鎮	珍	沈	救	冢
肉	遜	同	鬪	燈	妬	睹	免	腎	纏	點	鐵	嘲	弔	隄	鎮	珍	沈	救	冢

バ	バ	バ	ハ	バ	バ	バ	バ	バ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ハ	ネ	ネ	ニ			
跋	拔	罰	柏	麥	網	亡	莽	萌	帽	冒	髣	迸	襃	寶	杯	霸	黏	佞	姪	
跋	拔	罰	栢	麥	網	亡	莽	萌	帽	冒	仿	迸	襃	寶	盃	霸	粘	佞	姪	
ホ	ヘ	ベ	ヘ	ヘ	ヘ	ヘ	フ	フ	フ	フ	フ	フ	フ	フ	フ	フ	フ	フ	フ	
鋪	徧	貓	廳	弊	餅	併	屏	竝	填	佛	髴	普	富	冰	甕	廟	祕	汎	阪	
鋪	徧	貓	廳	弊	餅	併	屏	竝	填	佛	佻	普	富	氷	甕	廟	秘	泛	坂	
リ	ラ	ラ	ラ	ラ	ヨ	ヨ	ヨ	ヤ	ヤ	モ	メ	メ	ム	ミ	マ	ボ	ホ	ホ	ホ	
裏	覽	亂	郎	裸	欲	涌	餘	與	彌	野	摸	麵	綿	夢	脈	萬	樸	峯	豐	
裏	覽	亂	郎	裸	慾	湧	余	與	弥	埜	摸	麵	綿	夢	脈	万	朴	峰	豐	
あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	あ	
宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	
宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	
宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	
宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	
宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	
宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	
宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	
宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	
宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	
宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	
宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	
宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	
宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	
宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	
宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	
宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	
宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	宛	



さつぱり	薩張	ちんぷんかん	珍羹漢	ふるまひ	振舞	めつたに	滅多に
さほど	左程	つがふ	都合	べらぼう	筧棒	めつぼう	滅法
さやう	左様	つじつま	辻褄	へんてこ	變挺	めでたく	滅度
しどろ	四途亂	つど	都度	まじく	間敷	めんどう	面目度
しかつめらし	鹿爪らし	つぶとい	圖太い	まんざら	萬更・滿更	もつたい	面倒
しまひ	仕舞	でたらめ	出鱈目	みまひ	見舞	やかまし	勿體
しやあしやあ	洒蛙酒蛙	とかく	兎角	むだ	無駄	やたら	八釜し
じようだん	冗談・常談	とつび	突飛	むたい	無體	やつき	躍起
じよさいなし	如才なし	とんきよう	頓狂・頓興	むちやくちや	無茶苦茶	やはり	矢張
すてき	素敵・素的	とんちやく	頓著	むつかしく	六ヶ敷	やぼ	野暮
せは	世話	とんちんかん	頓珍漢	むてつぼう	無鐵砲	ゆゆし	由由し
せつかく	折角	なかなか	中中	むちやくちや	無閻	をこがまし	嗚呼がまし
だだ	駄駄	なにとぞ	何卒	めいめい	銘銘	わんぱく	腕白
たつて	達而	のんき	呑氣	めちやくちや	滅茶苦茶		
たのもしく	頼母敷	ばか	馬鹿				
だめ	駄目	はかなし	果敢なし				
たらふく	鱈腹	はで	派手				
ちだんだ	地團太	ふがひない	腑甲斐ない				
ちやうど	丁度・恰度	ふざける	巫山戯る				
ちよつと	一寸・鳥渡	ふつつか	不束				

國字表

(ハ)ノアルノハ漢字ニモ同體ノ文字ガアルガ別意義デアアルモノ

かき	(柿)	しきみ	(棊)	つばき	(樁)	はなし	嘸
かけす	鴛	しづく	(雫)	つが	榎	はなし	(咄)
かし	鏝	しのぎ	(鎚)	とく	梅	ひえどり	(種)
かすがひ	(拵)	しのぶ	(愚)	とち	(伽)	ひたき	(鵲)
かせぐ	(持)	しやちほこ	(徳)	とひ	(溶)	ひらき	(鶉)
かつを	(鯉)	すべる	鮎	とも	柄	ひやう	鶉
かばん	(靴)	そま	辻	なまづ	(種)	ひもと	(鵲)
かます	吹	たうげ	杣	など	靴	ふもと	(鵲)
かん	(爛)	たすき	峠	にほ	風	ほこ	(鵲)
くめ	灸	たこ	峠	にほ	杯	まき	(楨)
こがらし	込	たどる	辻	にほ	杯	まさ	(楨)
こらえる	込	たら	辻	にほ	杯	ます	(楨)
さかき	櫛	ちどり	辻	にほ	杯	まる	(楨)
さすが	(逋)	ちやう	辻	ぬえ	杯	み	(楨)
さぞ	(嘘)	ちん	辻	はかどる	杯	むしる	(楨)
さて	(扱)	つかへる	辻	はた	杯	もく	(楨)
さび	(鑄)	つき	辻	はたけ	杯	もんめ	(楨)
しかと	鳴	つじ	辻	はたら	杯		(楨)
しぎ	耽		辻		杯		(楨)

鏡 鏡

以下ニ掲ゲルコ  
ロハ近來西洋語ノ  
シク作ラナツテ新  
渡來ニ伴ハシタモ  
シクモ但シハ意ハ  
アルモハ支那ノ  
別アルガ支那ノ  
書ニモ見エラズ  
デアアル文字

イench (吋)  
グラム 瓦  
キログラム 瓦  
キロメートル 瓦  
センチメートル 瓦  
ミリメートル 瓦  
メートル 瓦  
メートル 瓦  
メートル 瓦  
マイル 瓦  
トン 瓦  
セン 瓦

腺 髓 哩 吠 米 突・米 耗 糧 秆 瓦 瓦 瓦



昭和六年九月十九日印刷  
 昭和六年九月二十三日發行  
 昭和七年二月二日訂正印刷  
 昭和七年二月六日訂正發行

不許複製

發行所

東京市神田區錦町一丁目  
 振替貯金口座東京四九九一番

編者 佐々政一  
 補修者 武島又次郎  
 補修者 笹川種郎  
 補修者 杉敏介  
 印發行兼者

東京市神田區錦町一丁目十番地  
 株式會社 明治書院  
 取締役社長 三樹退三

株式會社 明治書院  
 電話神田(25)二一四七番(3)

新撰國語讀本昭和二版(全十冊)

定價	
卷一・二	各六拾五錢
卷三・四	各六拾貳錢
卷五・六	各五拾六錢
卷七・八	各五拾參錢
卷九・十	各五拾錢

M. Amano



山原徳中學校

天野 充

M. Amano

